

# ポリシア、レプブリカ、レドゥクシオン ——スペイン植民地宗教政策としてのインカ文明の資源化（16-17 世紀）<sup>(1)</sup>——

武 田 和 久

## 要 旨

新世界アメリカで植民地政策を断行したスペイン人の中には、征服以前の先住民が実践していた文化、慣習、諸制度の一部を評価し、これを統治や布教の促進に活用しようと政策を提言・実行する者がいた。その典型が 16 世紀後半のペルー副王トレドやイエズス会の会員だった。先住民文化の評価にあたっての彼らの指標がポリシアという概念であり、その体現がルネサンスの思想に基づく計画都市レプブリカだった。興味深いことに、先住民の中にはスペイン人との接触以前からレプブリカと同様の計画性を持つ都市を建設した人々がいた。こうした二つの理念、ポリシアとレプブリカに基づいて先住民の統治と改宗を目的として実践されたのがレドゥクシオンという集住政策だった。本稿では 16-17 世紀のスペイン人がインカの文化的諸要素にポリシアやレプブリカを見だし、さらにはこれらをレドゥクシオンとして実践した模様を、中近世ヨーロッパの思想状況も踏まえつつ論じる。

## *Policía, República, Reducción: The Inca Civilization as Resources of Spanish Colonization and Christianization, 16-17<sup>th</sup> Centuries*

TAKEDA, Kazuhisa

## Abstract

Among the Spanish who came to the New World, there was an idea that a certain indigenous culture, custom and some institutions flourishing before the conquest would be available for the promotion of Spanish colonization and Christianization. The typical promoter of this policy was Viceroy of Peru, Francisco de Toledo, and the Jesuits in the second half of 16<sup>th</sup> century. Their criteria to evaluate the indigenous resources was the concept of *policía*, and its concrete embodiment was the construction of grid-designed city (*república*) under the influence of Renaissance thought. Some major indigenous groups such as the Aztecs and the Incas had already built the well-designed urban community very similar to the *república* even before the first contact with the Spanish colonizer. Based on the two principal ideas of the *policía* and the *república*, the Spanish established their fundamental congregational policy whose name was *reducción*, for colonizing and Christianizing the Native Americans. This article explores the historical process of Spanish colonization and Christianization for Amerindians in the 16<sup>th</sup>-17<sup>th</sup> centuries, mainly in the Andes and Río de la Plata region. The Spanish colonial policy was to find out the cultural component of *policía* and *república* in the indigenous resources to utilize them for the *reducción*. This policy was also under the influence of late medieval and early modern European thought.

先住民の法、慣習、行政等について知ることから得られるもうひとつの目的は、それらのもの自体を利用して彼らを助け、彼らを統治することである<sup>(2)</sup>。

## はじめに

ラテンアメリカの歴史を扱う膨大な書籍の中でも、ウルグアイ人のジャーナリストで作家のエドゥアルド・ガレーノ（Eduardo Galeano 1940-2015）による『収奪された大地』（原題 *Las venas abiertas de América Latina*）は世界的によく知られる一冊である。同書はスペイン語の初版が1971年にモンテビデオで出版されてから着実に版を重ね、2000年出版の時点では72版という驚異的な版数を記録した。各国語への翻訳も多く、日本語訳は1986年に出版された<sup>(3)</sup>。

『収奪された』というタイトルからもわかるとおり、1492年の「発見」以来、ラテンアメリカはスペイン、ポルトガルを嚆矢とした欧米列強の支配と搾取を500年にわたって受け続け、その負の遺産は現在も、そして未来永劫も消えることはない、というのがガレーノの強いメッセージである。実際に今日のラテンアメリカが「開発途上地域」と言われるのにも、こうした歴史的背景が関係している。

ガレーノの主張は間違っていない。しかし植民地空間のラテンアメリカでは、負の遺産に加えて、他の空間では生まれることのなかった独自の文化が醸成されたことも事実である。イベリア両国がその海外領土に植民地政策の根幹としてキリスト教の定着を強力に推進していたことは周知の事実だが、この過程でアメリカ大陸の土着の文化とキリスト教文化とが融合した「ミッション文化」（mission culture）が育まれた重要性を指摘したのがデイビッド・ブロック（David Block）だった<sup>(4)</sup>。以後、特に美術史の分野において、ミッション文化はキーコンセプトとなり、絵画や彫刻などの美術作品に表れる同文化の諸相を詳細に論じる研究が国内外で輩出された<sup>(5)</sup>。また同時期、スペイン・ポルトガル人の搾取と暴力により蹂躪されてばかりだったと思われていた先住民の中から「ヨーロッパ・キリスト教文化」を巧みに咀嚼・吸収し「先住民知識人」として新たに生まれ変わった人々の誕生も近年注目され始めるようになった<sup>(6)</sup>。

暴力や搾取という否定的なイメージに伴う植民地

という空間で誕生した「先住民知識人」が注目に値するのは、彼らの存在が、征服以前の先住民たちが代々継承してきた土着の文化と、征服以後にもたらされたスペインを基調とするヨーロッパの文化との融合だからである。文字文化に関して言えば、征服以前のアステカでは絵文書が、インカでは縄の結び目を使ったキープ（quipu）がそれぞれコミュニケーションのツールとして機能していたが、これらは近世のヨーロッパ人にとっては「文字」として理解し難かった。征服以後、先住民の言葉は往々にしてキリスト教宣教師によってアルファベット表記され、先住民言語に関する辞書や文法書がスペイン領アメリカ各地で作成された。この過程で征服された先住民や、その血を引く子孫の中からは、スペイン語や、征服後にアルファベット化された母語を操る者が現れた。彼らの一部は絵文字やキープといった非文字ツールを媒介に伝えられてきた知識や情報をスペイン語で著すようになった<sup>(7)</sup>。こうした興味深い出来事が起きた前提条件は、征服対象とした先住民たちの歴史、文化、慣習をスペイン人たちが根絶やしにすべきと考えていたのではなく、植民地運営のためにその一部を積極的に利用するという基本政策を征服の初期から実践していたことに依拠している。

このような議論を踏まえて、近世のスペイン人がアメリカ先住民のいかなる文化的要素を肯定的に評価して植民地行政に活用しようとしていたのか、という問題が浮上するが、これについては、近年ジェレミー・マンフォード（Jeremy Mumford）が植民地期アンデスを事例として示唆的な議論を展開した。彼は2012年に出版した『垂直帝国』（*Vertical Empire*）においてインカ帝国の統治がある種の社会工学（Social Engineering）に基づく壮大な実験だったと論じた<sup>(8)</sup>。そして多様な文化的背景を持つ人々が広大な帝国内で円滑に統治されていた、というインカの理想的なイメージがスペイン人たちの間で膨れあがり、特に第5代ペルー副王フランシスコ・デ・トレド（Francisco de Toledo 1515-1582 [任期 1569-1581]）が管轄地域内の植民地体制の維持・強化のためにインカの統治技法を活用しようと様々な政策を立案、実践していたと論じた。その典型例がペルー副王領南部の山間部で1570-1575年に実施された総巡察（Visita General）を経て実行に移された大規模な先住民集住政策（reducción [以後この政策をレドゥクションと表記]）であった。これ

により 1500 万人もの先住民が新たに設けられた 1000 以上の居住地に集住させられた。こうした歴史的な背景を踏まえて、マンフォードは、インカの統治技法とトレドのレドゥクションは共に「社会工学的」と呼ぶに値する壮大な実験だったと結論づけた<sup>(9)</sup>。

マンフォードはインカの統治技法を国家主導の「社会工学」と定義したが、インカの政体のこうした特質を近代に誕生した社会主義の前触れとみなした研究者がいた。フランスの経済学者ルイ・ボードン (Louis Baudin 1887-1964) である。彼が 1928 年に公にした『インカの社会主義帝国』(*L'empire socialiste des Inkas*) では、インカが実践していた経済システムに 20 世紀の社会主義経済と似た特徴が認められるという議論が展開され、同書はスペイン語や英語にも翻訳された<sup>(10)</sup>。そしてこのボードンが、本稿で取り上げるスペイン領南米ラプラタ地域<sup>(11)</sup>のイエズス会布教区<sup>(12)</sup> (*reducciones jesuíticas*) にもインカに通じる社会主義的な要素を見いだしていたことが、亡くなる 2 年前に刊行された小冊子『パラグアイのイエズス会国家』(*L'État jésuite du Paraguay*) から窺える<sup>(13)</sup>。

19 世紀末から 20 世紀前半にかけて、社会主義に対する期待と渴望が人々の間で燃えあがっていた頃、ラプラタ地域のイエズス会布教区を社会主義もしくは共産主義に基づく理想社会と定義した研究者として、ドイツの経済学者で歴史家のエバーハルト・ゴタイン (Eberhard Gothein 1853-1923) や、フランスの歴史家で文筆家のクロビス・ルゴン (Clovis Lugon 1907-1991) が挙げられる<sup>(14)</sup>。今日、こうした研究者の主張は先のボードンと同様に、彼ら研究者自身が追い求める理想像を過ぎ去った過去に投影したに過ぎないとして、イエズス会布教区の専門家の間では信頼に足る研究とはみなされていない。しかし本稿では、このように一度は無価値として葬られてしまった視角にあえて注目したい。なぜなら「資源化」をキーワードとして浮上してくる、今日的に重要な視角をこれらの研究に対して見過ごすことはできないからである。

資源化とは、人類学者の内堀基光代表の共同研究<sup>(15)</sup>の成果として公にされた全 9 巻にわたる論集『資源人類学』(弘文堂、2007 年) で提示された概念である。この研究で資源は「環境の中にあって人間にとって役立つもの、利用に供されるものの全

て」と広く定義され、事物が役立つと認識され利用されていく過程、すなわち資源化されていく過程に研究の主眼がおかれた。

資源化が生じる前段階として、特定の事物の利用を試みる人間や組織、制度といった主体の存在が前提となる。この主体は何らかの目的を持っており、それを実現させるための手段として特定の事物の資源化を試みる。そしてそのための資源へのアプローチとして、資源に物質としての有用性を求める視角と、有用という意味づけを行う視角、すなわち「生態資源」と「象徴資源」という少なくとも二つが指摘できる。こうして生態や象徴という観点から資源とみなされた事物は、関係当事者の間で広く流通ないし交換され、結果として資源の循環が生じる。この循環は半永久的な運動ではない。事物は十分に利用され一定の役割を終えるとその資源的な価値を失い、脱資源化という帰結に至る。こうした一連のサイクルが内堀を中心に提示された資源化にかかわる理論的概念である<sup>(16)</sup>。

こうした研究成果が公にされておよそ 10 年が経過した 2015 年、鈴木紀は、インカ、マヤ、アステカといったアメリカ大陸の古代文明を資源化の観点から議論する視角を提示した。周知のとおりこれら三つの文明は、16 世紀のスペイン人によるアメリカ大陸征服の過程で滅亡し歴史的な記憶と化した。しかし興味深いことに、こうした先住民古代文明は忘れられ放棄されることなく、滅亡以後の時代においてもスペイン人たちの関心の中心にあり続けた。彼らは広大なアメリカ植民地の効率的な統治と運営のために、かつて栄華を極めた先住民文明の諸側面を包括的に把握し、そうして得られた成果を巧みに活用しようとしたのである。

鈴木によれば、アメリカ古代文明の再利用はスペイン植民地時代に限定されない。再利用は現代においても活発に行われており、そうした現代的な状況理解のために鈴木は次の三つの視角を提示した。第一に「資源の政治学」であり、古代文明のある一側面を資源化しようと複数の当事者(鈴木はこれを「アクター」と定義する)が競合するケースである。この場合、個々の当事者が対象を生態資源や象徴資源として様々にみなすことで当事者間での認識のずれや争いが生じる可能性がある。第二に「資源化の解釈学」であり、これは当事者間で生じた政治的抗争を研究者が解釈する試みである。その際に重要な



のは研究者が当事者の視点に立ち、当事者が資源化という目的をどの程度まで達することができたのか否か、あるいは資源に対してどのような評価を下したのかを見極めることである。第三に「資源の想像」であり、これは鈴木によれば、資源化を試みる当事者が情報不足や思い込みによって資源に関する仮想的な実体を考案する過程を明らかにすることである。この過程には当事者の想像力を起因として誤った解釈や事実の歪曲、他からの流用といった問題が絡んでくる<sup>(17)</sup>。

内堀や鈴木のような議論と本稿がこれから展開していく議論とを接合させるにあたって先行研究を幾つか挙げれば、碩学ジェームズ・ロックハルト (James Lockhart) の議論、植民地時代のヌエバ・エスパーニャ (現メキシコ) を舞台とした先住民たちの土着の制度がスペイン人によって利用された例がある。スペイン人たちは、先住民言語でアルテペトル (Altepetl) と呼ばれた土地や民族に根差した政治体は破壊せず、むしろこれを土台ないしは包含したかたちで新たな植民都市を建設していったという議論である<sup>(18)</sup>。一方アンデスに関しては、同じく碩学ナタン・ワシュテル (Nathan Wachtel) は、1971年初版の世界的にも有名な『敗者の想像力』において征服者であるスペイン人による先住民文化の再構築を論じた<sup>(19)</sup>。この視点は後にセルジュ・グリュジンスキ (Serge Gruzinski) やトーマス・アベルクロンビー (Thomas A. Abercrombie) にも継承されていった<sup>(20)</sup>。

以上、ここまで紹介してきた先行研究を踏まえて本稿では、アメリカ大陸の植民地化や先住民のキリスト教化という目的のもと、土着の文化や制度がスペイン人官吏や宣教師たちによってどのように利用 (すなわち資源化) されていったのかを、アメリカの「発見」前後の中近世ヨーロッパの思想状況を踏まえながら考察していく。詳細はこれから議論していくが、近世のスペイン人ほど、理想的とみなした画一的な原理に固執し、その原理を広大な空間にあまねく普遍的に広め、空前絶後の大規模な社会実験を成功させようと狂信的なまでにのめりこんだ人々はいない。この背景には、中世から脈々と続く終末論的な世界観や、古典古代の文芸の復興を目指すルネサンスの影響、8世紀近くわたって断続的に戦火を交えてきたイスラーム教徒との戦いの終焉 (1482-1491年のグラナダ戦役)、前代未聞のアメリカ

の「発見」(1492) といった、スペイン人たちが経験してきた劇的な歴史のうねりが関与している<sup>(21)</sup>。

スペイン人が広大な海外植民地のあらゆる場所に導入し、16世紀から300年にわたって実践し続けた先住民統治・改宗のための基本政策であるレドゥクションは、彼らが理想とする「アイデア」を先住民の心身に植えつけるための実験的な試みであった。そしてそのアイデアの源泉とは、彼ら「スペイン人」なるもののアイデンティティの根幹を形成したヨーロッパ古典古代の政体や思想、さらにはキリスト教にまつわる文化や慣習であった。こうしたもののうち、非物質的な礼節や振る舞い、態度や物腰といったものはポリシア (policia)、そうしたポリシアを身に着けた人間が暮らす理想的な空間はレプブリカ (república) と総称された。つまり「発見」以来、海外領土で実践されたスペインの植民地・宗教政策であるレドゥクションを支える基本理念はポリシアならびにレプブリカに集約できるのだが、これら三つのキーコンセプト、ポリシア、レプブリカ、レドゥクションが密に関連づけられて議論された先行研究は、管見の限り存在しない。加えて、レドゥクションが実は征服以前の先住民の文化や慣習を一定の割合で取り入れながら実践されていた事実は近年になってようやく指摘され始めたことであり、このような見方も同様に先行研究では等閑視されてきた。

本稿は三つの部分から構成され、以下ではそれぞれの部分で展開される議論の概要を紹介する。1では、中近世のスペイン人が重視したポリシアという概念について論じる。彼らは他者の文化水準を判断する際、ポリシアなるものを有しているかどうかを判断の決め手とした。ポリシアは秩序 (orden) という概念とも深く結びついていた。相手の文化に秩序をみいだせたとき、スペイン人は偉大なるヨーロッパ・キリスト教文化の体現者である自分たちと同様にポリシアを有する存在として対象をみなした。逆に「無秩序」と判定された相手の文化は、一方的に劣ったものとみなされた。アメリカ大陸の多種多様な先住民文化はスペイン人にとって非常に異質で、これの理解は困難を極めた。彼らにとって単純かつ明快な方法は先住民文化を「無秩序」と定義づけ、これを「秩序化」という名目で植民地政策ならびにキリスト教布教を推進することだった。しかし興味深いことに、スペイン人たちは、彼らの到来以前にアメリカ大陸に存在していた巨大な「先

住民国家」が有していた制度や慣習の一部に対しては、ヨーロッパ・キリスト教文化に匹敵する「秩序」をみだし、高く評価し、植民地政策や改宗事業に積極的に活用しようとした。前者に関してはペルー副王トレドが、後者に関してはトレドの命を受けたイエズス会士ホセ・デ・アコスタ（José de Acosta 1540-1600）が代表格である。彼らはいずれも、征服以前のインカに理想的な秩序を求め、征服以後の植民地社会の混乱を沈め、植民地体制とキリスト教の速やかな導入と定着を目指したのだ。

2では、中近世のスペイン人たちがインカを、ポリシアに加えてレプブリカを体現する人々とみなしていたことを論じる。議論の焦点となるのは、都市計画に関する基本的な理念である。中世後期から近世にかけてのヨーロッパはルネサンスの影響下にあり、都市を人工的に秩序だて理想的な形態に整えようとする動きが空前のブームとなった。この動きはスペインにおいても例外ではなく、彼らはアメリカ植民地に対しても計画都市を精力的に建設した。理想的に秩序づけられた生活空間はレプブリカとされた。そして興味深いことに、征服以前のインカも都市建設の際にスペイン人にとってのレプブリカに等しい秩序と計画性を重視していた。新旧両世界に偶然にも同時代的に実践されていた都市建設に関する人工的な計画性という根本理念をここでは論じる。

3では、アメリカ大陸の植民地化と先住民のキリスト教化を効率よく進めるのに包括的に導入された集住政策レドゥクションを論じる。これはペルー副王トレドが1570-1575年に管轄地域で大規模に導入し、その実践にあたってはアコスタをはじめとするイエズス会士たちが特に中心的な役割を担った。集住政策実践の場であり同じくレドゥクションと呼ばれた布教区は計画的に設計され、一定数の先住民が集められ、スペイン人が理想とするヨーロッパ・キリスト教文化の教育が体系的に行われた。このような経験はイエズス会士によって引き継がれマニュアル化され、アンデス地域を超えてその東南部の低地であるラプラタ地域にも導入され、世界的にも有名なイエズス会布教区が1609-1767年にかけて花開くことになる。元来こうしたレドゥクションは、中近世ヨーロッパ思想の影響下にあったスペイン人たちの独創的かつオリジナルなアイデアとされてきた。しかし近年では、布教区の建設に際して選定された土地が実は太古の昔から先住民にとって歴史・

宗教的な観点から重要な場所であったことが指摘されている。また食糧の備蓄と供給のために布教区の周囲に設けられた耕作地の管理・運営の仕組みに関しても、征服以前のインカによって実践されていた仕組みとの間に共通要素がみいだせるなど、先住民たちが古代アンデス文明の形成と共に培ってきた制度や慣習を参考としつつスペイン人たちはレドゥクション政策を進めていたのではないと思われる節がある。この3ではこうした問題を議論する。

最後に、本稿の議論の中核はペルー副王トレドや、彼の命を受けた部下やイエズス会が植民地政策ならびに先住民改宗事業を行う際に古代インカ文明にどのように着目したかの解明だが、こうした問題に関連する議論として、(1) 彼らが古代インカ文明に着目するに至った思想史的な背景、(2) インカを「ポリシアとレプブリカの体現者」として称揚したドミニコ会士バルトロメ・デ・ラス・カサス（Bartolomé de las Casas 1484-1566）の著作、(3) そして19世紀のラテンアメリカの独立期においても繰り返されていた古代先住民文明を資源化しようとする動きなどを紹介する。

## 1. ポリシア—スペイン人が好んだ 他者認識のための指標—

### 1-1. ポリシアという秩序

1581年から翌年にかけて、ペルー副王トレドは、副王就任以来13年にわたる仕事を振り返りながら、スペイン国王フェリペ2世に宛てた報告書の中で、アメリカ先住民をキリスト教徒に改宗させる前段階として、まずは人間にする必要性を述べている。報告書の中で特に興味深いのが、「冷静かつ理性的に生きるための政体と模範」(gobierno y modo de vivir político y razonable)を先住民に導入せねばならないという一文である<sup>22)</sup>。こうした表現には、近世のスペイン人がいかなる指標に基づいて人間の能力を判断していたのかを知るカギが反映されている。本稿の議論の中核となるイエズス会士アコスタも同じ趣旨の考えを書物に著している。彼にとって先住民とは人間以下の野蛮人であり、まずは彼らに人間になるための必要な事柄を学ばせ、その後でキリスト教徒になることを学ばせるというステップが説かれた<sup>23)</sup>。

先住民に対するこうした蔑視的な見方が明確に表明された記録として、副王トレドの聴罪司祭を務め

たイエズス会士バルトロメ・エルナンデス (Bartolomé Hernández) が 1572 年 4 月 19 日にリマでフアン・デ・オバンド (Juan de Ovando) に宛てた手紙が存在する。ここには先住民が「必要なポリシア」(policía necesaria) を欠いているゆえに信仰が内面化されない問題が指摘されている。加えて、トレドの指摘と同様に、先住民が「政治的に生きる人間になってくれるように」(sean hombres que vivan políticamente) という期待も込められた<sup>(24)</sup>。

人間の能力、もっといえばある対象が人間か否か、このような根源的な問題を判断するための指標は、その対象がポリシアを有するか否かにかかっていた。イエズス会士以外の例も幾つか挙げれば、メキシコ中西部ミチョアカンの司教バスコ・デ・キロガ（Vasco de Quiroga 1470-1565）が国王カルロス1世に宛てた1535年7月24日付の報告書には次のようにある。以下の引用で「秩序正しい文明的生活」と訳出されたスペイン語の原語が「policía」である。

人々を統べ導くのに必要な権力と支配権をもつておられる陛下は（インディアスを）統治し、命令を下すことができるだけでなく、君主として、人々のために一定の秩序と生活環境を整えなければなりません。つまり、先住民が自活し、養うべき者を養い、また子孫を残し、しかるべき正しい形で改宗し、生きながらえ、今のような死に方をしないですむような環境のことです。今は、秩序正しい文明的生活を欠き、分散し孤立して暮らしているため、苦難と暴力を受けています。文明的生活さえ整備できれば、万事が解決し、（悪は）なくなり、秩序が打ち立てられ、皆に幸福と平安が訪れることでしょう<sup>(25)</sup>（傍点は本稿筆者による）。

グアテマラのアウディエンシア (Audiencia [スペイン領アメリカで司法・行政・立法を司った王室機関]) の役人トマス・ロペス (Tomás López) は、このポリシアが示す具体的な内容を 1550-1551 年に記した書簡で次のように述べている。すなわちそれは、スペイン人が行うような仕方で食べたり飲んだり、服を着たり、体を清潔にしたり、人と接したり、礼節を保ったり、礼儀ある話し方をしたり、子供を育てたり、スペイン語を話したりなど、こうしたスペイン人が当たり前のように実践する慣習的な

知識、能力、行動様式、それがポリシアであった<sup>(26)</sup>。さらには前述の副王トレドも、先住民を一般に秩序を欠く存在と見ており、ゆえにレドゥクションを強圧的にでも導入して「無秩序」に生きる彼らに規律を徹底させようとした。

秩序に基づく生活を営めない人間は「無秩序」、このような見方を考える時、本稿の導入部で言及したマンフォードの指摘は示唆的である。彼によればポリシアとはギリシア語のポリス (polis) に由来する地中海地方特有の考え方であり、都市や空間を組織化する際の重要概念であったという。そして「都市や空間の組織化」というのは、具体的には、縦横一直線に伸びるグリッドラインに基づく街路を敷き、整然とした都市空間を人工的に設けることを意味した<sup>27)</sup>。ポリシアとは極めてスペイン語的な概念で、英語には明確な対応語が存在しないとまでマンフォードは言っている<sup>28)</sup>。

## 1-2. ポリシア保持者としてのインカ

「先住民は秩序を持たない」。こうした考え方はヨーロッパ人、特にスペイン人が当たり前のこととして身につけている衣食住をはじめとする慣習や文化を先住民たちは有していない、従って彼らは無秩序なのだという差別的なものである。しかしながら、征服以前のアメリカ大陸に巨大な国を築いた先住民たちが「秩序を有していた」と主張するスペイン人が一定数存在した事実は興味深い<sup>(29)</sup>。その一人が、インカの征服の詳細を伝える貴重な記録を残したペドロ・シエサ・デ・レオン (Pedro Cieza de León 1520-1554) である。

シエサはインカとその他の先住民集団とを明確に区別している。例えば次の引用である。

(旧インカ帝国領の周縁に位置するポパヤン地方の) 先住民は全員、人肉を食していた。このポパヤン市の周囲にある地方はペルーの中の大部分の土地で最も人口の多い所だったから、もしインカに支配され、征服されていたら、このうえなく素晴らしい、また、豊かな土地になっていただろう。誰もがそう信じている<sup>(30)</sup>。

この引用には現在のコロンビア中部ポパヤン地方の先住民が言及されており、シエサはインカと接触以前の彼らについて否定的に評価している。



インカに対するシエサの格別の評価は彼らのインフラ整備の巧みさにも表れている。次の引用では、インカと昔のスペイン人双方に共通する広大な土地を支配するための優れた統治技法として、街道に対する理解が挙げられている。

このように、スペインで、昔の人たちが全土をいくつかの地方に分けたのと同じように、この先住民たち（インカ）も、非常に広大な土地に広がる各地方を数えるのに、道によって理解したのである<sup>(31)</sup>。

さらに今日、ミティマエス<sup>(32)</sup> (mitimaes) として知られるインカ独特の開拓者派遣制度、東アジアの防人や屯田制度のような、ある地方に一定数の家族を派遣・定住させて同地の治安維持や開拓を担わせる制度は、広大な領土支配のための優れた技法だったとして、シエサは次のように高く評価している。

この章で、私はミティマエスと呼ばれる先住民について書きたいと思う（中略）。これ（ミティマエス）は、この国（インカ）の管理・維持、さらには人々の植民にすら役立つところが大きかった。そして、これらのミティマエスがどうやって、またどのように配置され、なにをし、どんな仕事についていたかを理解すれば、読者の方々は、インカたちが、これだけの土地や諸地方を実際に治めるにはどうしたらよいか、完全に分かっていたことが納得ゆくだろう（以下省略）。

ミティマエスとは、ある土地から他の土地に移された者たちをいう。インカの命令によって設置された第一の種類のミティマエスは、インカの手によってある地方が征服されたりあらたに従属させられたりしたのち、同地方をしっかりと把握するためにそのような配置をおこなったものであって（中略）、

彼ら（ミティマエス）にたいしては、出身地とおなじ気候・風俗の他の土地に住むように命令が下された（中略）。そしてそのような土地で、もとの土地にあったのと同じ、ないしはそれ以上の土地・畑・家などが与えられた。他方では、長いあいだ平和で友誼的<sup>ゆうぎ</sup>な統治がおこなわれ、奉仕の意思が明らかな地方や土地から

（中略）、人を移動させ、あらたに征服された土地に割りこませて、征服し終わったばかりの先住民の間に住ませた（以下省略）。

ミティマエスのあるものは、以上の目的のために置かれたが、その中から多くの者たちが、インカや太陽〔神〕の家畜の番人および牧夫頭として引き抜かれ、またそのほかにも、金銀細工師・石工になるもの、農夫になるもの、絵をかいいたり彫刻をしたり、塑像を作る者なども出た<sup>(33)</sup>。

そして同時にシエサは、キリスト教徒であるスペイン人が征服の過程で元来インカが有していた多くの優れた制度を破壊してしまったことを憂いている。

こうして、（ミティマエスという制度のもとで、）この王国には、インカたちの時代において、肥沃であると思われながら人の住まないままになっている土地はほとんどなく、この王国にはじめてやってきた最初のキリスト教徒たちが知っているように、すべてのところに人がたくさん住みついていて、あのインカたちが、異教の偶像崇拝者でありながらあれだけ広い土地を治め維持するためにりっぱな秩序を保っていたのに、われわれはキリスト教徒でありながら多くの王国を破壊してしまったことを思うと、少なからず悲しく思う<sup>(34)</sup>。

インカに対するこのような高い評価はシエサに限ったことではない。有名なクスコ生まれの混血の文筆家インカ・ガルシラソ・デ・ラ・ベガ (Inca Garcilaso de la Vega 1539-1616) も、インカ帝国がローマに匹敵する存在と考えていた<sup>(35)</sup>。

同様の例をさらに挙げてみよう。年代記を執筆する際にシエサがよく参照した文献として、ドミニコ会士のドミンゴ・デ・サント・トマス (Domingo de Santo Tomás 1499-1570) の著作が知られている。彼はペルーの先住民言語に関する文法書を1560年に公にした。サント・トマスは同書の冒頭、国王フェリペ2世に宛てた献辞の中で、インカのケチュア語が「偉大なるポリシア」(la gran policía) を有するとした<sup>(36)</sup>。また征服者ペドロ・ピサロ (Pedro Pizarro 1515?-1602?) が1531-1555年頃の体験をもとに1571年に脱稿した年代記のタイトルにも注目した

い。ペルー王国の人々、すなわちインカが「政体と秩序」(gobierno y orden)を有していたとある<sup>37)</sup>。

先住民の多様性を無視し、あるいは一緒にくたにして蔑視する見方は、コロンブスによるアメリカの「発見」(1492)とほぼ同時に、未知なる大陸の探検へと出かけて行った多くの人々が残した記録を下地として形成されてしまったといってもよい。例えばフィレンツェ生まれの探検家アメリゴ・ヴェスプッチ (Amerigo Vespucci 1454-1512) による新世界の住民、すなわちアメリカ先住民に対する次の説明は、こうした差別的な一般化の典型である。ヴェスプッチは「新大陸に住む人たちの性質と習俗について」と小題をつけた箇所先住民たちの文化や生活様式について説明しているものの、彼らが具体的にどのような地方で暮らす人々かは述べていない。解説者の増田義郎がつけた注のおかげで、読者はこれがブラジル海岸部の先住民トゥピナンバ (tupinambá) と理解できるが、以下の引用だけ読めば、アメリカ大陸のすべての先住民が次のような生活形態や慣習を有していたと錯覚してしまう。

かれらは毛織物も亜麻布も綿織物も、いっさい必要ないので持っておりません。また私有の財産というものがなく、すべてが共有になっています。かれらには国王も官憲もなく、各人がみずからあるじです。かれらは好きなだけの妻をめとります。息子は母親と、兄は妹と、従兄<sup>いとこ</sup>は従妹と、男と女は行きあたりばつりに婚姻をするのです。また望むときはいつでも離別し、この点なんらの秩序もありません。さらにまた、かれらには教会も法律もなく、偶像礼拝者でもありません。さてなんと申したものでしょうか？かれらは天然自然のままに生きており、禁欲主義者というよりは享楽主義者<sup>エビクレーオ</sup>というほうが正しいでしょう。かれらのあいだには商人というものは存在せず、交易ということをしたしません。彼ら同士が戦うときは術策もなければ秩序もありません。老人たちがなにか弁舌をふるって自分の考えに若者たちをひきつけ、かれらを戦闘にかりたて、そこで残忍な殺戮をするのです。戦闘で捕虜になったものは、生きたままで戦勝者に仕えることはなく、あとで殺されて食用に供せられるだけです。すなわち、かれらはたがいに、勝者は敗者を食ってしまう

のでありまして、肉のなかで人間の肉は普通<sup>38)</sup>の食物なのです。このことは正真正銘であります<sup>38)</sup>。

### 1-3. イエズス会士ホセ・デ・アコスタがインカに見いだしたポリシア

アメリカ先住民を過度に一般化して蔑視する傾向を問題視し、また多くの征服者や植民地官僚が残した記録を精査し、先住民の多様性を徹底的に観察・分類することにより、彼らの在来の文化や慣習の中から評価に値する要素を抽出して肯定的に認めるべき、と考えたのが前述のイエズス会士アコスタである。以下では先住民に対する彼の認識を詳細にみていく。

アコスタがリマに到着した1572年は前述のペルー副王トレドの任期中であった。彼は副王が管轄地域で実施した総巡察にも同行し、現在のペルー南部からボリビアにまたがる広大な地域を検分した。1576-1581年にはイエズス会ペルー管区長を務め、就任早々の1576年1月16日には第一回管区会議を招集した。ここで布教区を主軸とする先住民改宗政策や、スペイン人によって一般にカシケ (cacique) と総称された先住民首長の子弟のための教育機関として学院 (colegio) を整備することがアコスタより提起された。彼のこうした考えはこの時点ではまだ草稿中であったが、後に1588年にセビリアで刊行された『世界布教をめざして』(De Procuranda Indorum Salute) に反映された<sup>39)</sup>。

インカやこれに匹敵するアステカを他の先住民集団と峻別するアコスタの考えは彼の代表作『新大陸自然文化史』(Historia natural y moral de las Indias) に明確に示されている<sup>40)</sup>。例えば次の一節である。

西インディア (スペイン領アメリカ) では、確固たる基礎を持つ王国ないし帝国は、たったふたつしか見つからない。すなわちヌエバ・エスパーニャ (現在のメキシコ) のメキシコ人のそれと、ペルーのインカのそれである。(中略) ひとつ確かなこととしていえるのは、立派な秩序と社会生活の点では、この二王国は、あの新世界で発見された先住民の他の領国 (señorío) に、はるかに立ちまさっていた<sup>41)</sup>。

ここでアコスタは、インカやアステカを他の先住民集団と同一視できない理由を、彼らが「立派な秩



序と社会生活」を備えていた点に求めている。つまり秩序の有無を、先住民の優劣を評価する指標としている。そして次の一節においてアコスタは、秩序を有する先住民とそれ以外を混同することに警告を発している。

先住民の行っていた宗教に関する問題を済ませたから、この巻では、彼らの習慣、行政、政治に関して、ふたつの目的をもって書きたいと思う。第一の目的とは、先住民に関しての俗説—残忍で、動物的で、悟性を欠くか、その名に値するほどのものを持たない存在だとする誤った意見—を論破することである。(中略) 私が思うに、このひどい偏見を打ち砕くのにもっともよい方法は、先住民が、自分たちの法のもとに暮らしていた時代に持っていた、秩序と行動の様式を知らしめることである。それらの点に関し、彼らが多くの野蛮なこと、根拠を欠いたものごとを持っていたにせよ、驚嘆に値する他の多くのものがあったことも事実であり、(中略) だが、古代先住民の秘密、習慣、政治などについてつっこんだ知識を持った、もっと好奇心の強く、博識な人たちは、ぜんぜん違ったふうに考え、彼らがひじょうに理にかなった秩序を持っていたことに驚きを示している<sup>(42)</sup>。

さらにアコスタは、『世界布教をめざして』の序文の冒頭において、先住民の文化的多様性の甚だしさを次のように述べている。

インディオ〔の霊〕をいかにして救済するか、その方法を正確かつ的確に述べるのはとても難しい。なぜなら、これら野蛮人〔先住民〕の国があまりに多いうえ、それぞれの気候や土地柄、それに衣服のあり方から知力の程度や習慣、伝統にいたるまで、なにもかも大きく異なっているからである<sup>(43)</sup>。

アコスタがこのようなインカおよびアステカ肯定説を展開するのに根拠とした資料とはどのようなものだったのか。彼は『新大陸自然文化史』の中で「そのほか、記録または口頭により、私がいま説明しつつあることがらについて、詳しく知らせてくれたまじめな著述家たちがいる」と述べている<sup>(44)</sup>。また同

書の第6巻、第5章「シナ(中国)人の用いる文字、および書籍について」ではメキシコ訪問時に出会った中国人を相手に簡単なインタビューを行ったことを記している<sup>(45)</sup>。さらには先に言及したもう一つの代表的著作『世界布教をめざして』の中には時のイエズス会総長エベラルド・メルクリアノ(Everardo Mercuriano 1514-1580)への献辞があり、これを読むと、アコスタがインカやアステカに秩序の存在をみていた多くの有識者と接触したり、彼らの著作を参照したりしながら著述作業に従事していたことがわかる<sup>(46)</sup>。

『新大陸自然文化史』の中でアコスタは、特に影響を受けた人物として二人の名前を挙げている。

(先住民にも秩序があるとみなす) そのような著述家としては、ペルーに関する問題で私が主として扱ったポロ・オンデガルドとか、メキシコの材料をあおいだファン・デ・トバルなどがある。後者(トバル)はメキシコの教会の受録聖職者(prebendado)だったが、今ではわれわれのイエズス会士であり、(ヌエバ・エスパニーヤ)副王マルティン・エンリケス(Martín Enríquez 1510?-1583 [任期 1568-1580])の命により、熱心に詳しくあの国(メキシコ)の人々の古代史の調査をした人である<sup>(47)</sup>。

結婚に際しては、彼ら(先住民)なりの契約のやり方があり、それについてリセンシアド・ポロが、一篇の論文全部をさいて説明しているが、もう少しあとでそのことを述べよう。それ以外のことがらでも、彼らの儀礼、儀式はなんらかのかたちで理性的なものを持っていた<sup>(48)</sup>。

今日「リセンシアド・ポロ」としても知られるオンデガルドとは、ペルー副王領で活動し、植民地政策に関する多くの著作を残したスペイン人官吏ファン・ポロ・デ・オンデガルド(Juan Polo de Ondegardo 1500?-1575)のことであり、「学士ポロ」(Licenciado Polo)の異名でも知られる。そして先のアコスタと同様にペルー副王トレドの総巡察にも同行した人物である<sup>(49)</sup>。オンデガルドの著作は同時代のスペイン人たちの間でよく知られていた。例えば作者不詳の『古代の習慣についての報告書』にも「Polo」と言及されている<sup>(50)</sup>。またオンデガルドと

イエズス会は良好な関係であった。アコスタ研究の第一人者フェルミン・デル・ピノ (Fermín del Pino) によれば、彼とその妻はチュキサカ (Chuquisaca [現ボリビアのスクレ]) のイエズス会学院の支援者 (benefactor) であり、おそらく彼の孫もイエズス会に入会したとみている<sup>51)</sup>。これに関連して、イエズス会士のベルナベ・コボ (Bernabé Cobo 1582-1657) は、『新世界の歴史』(*Historia del Nuevo Mundo*) の中で、インカの儀礼や慣習について持論を展開する際にオンデガルドを引用している<sup>52)</sup>。

次にトバルについてだが、フアン・デ・トバル (Juan de Tovar 1547?-1626) はメキシコ中央高原のテスココ (Texcoco) で混血児として生まれ 1573 年にイエズス会に入会、前述の引用中でも言及されているヌエバ・エスパーニャ副王エンリケスの命を受けて先住民文書を集収し、メキシコ古代史を執筆した。その一部はラミレス絵文書 (Códice Ramírez) として今日に伝わる。同じくヌエバ・エスパーニャで活動しナワトル語にも造詣が深かったフランシスコ会士ディエゴ・ドゥラン (Diego Durán 1537-1588) と親戚であったことから、トバルはドゥランが残した記録も活用できた<sup>53)</sup>。

続いて以下では、アコスタの『新大陸自然文化史』と、これが出版されたのと同時期に出回っていた他の筆者による著作とを比べて、インカを称揚する際の類似する言説に注目したい。先にインカ帝国をローマになぞらえたインカ・ガルシラソについて論じたが、同種の例が『新大陸自然文化史』にもある。まずは次の引用である。ここは同書を締めくくりにあたって書かれた第7巻、第28章からの一節である。

以上の諸巻で述べ、論じたことから、ペルーでもメキシコでも、キリスト教徒が到達したところには、国が最高の状態に達し、その発展の絶頂にあったことは、どなたにもお分かりと思う。(中略) そこで、キリストの法<sup>のり</sup>が来たときローマの国が絶頂に達していたように、西インディアス (スペイン領アメリカ) でも事情は同じだったのだ。そして、これは本当に神の最高の摂理だった<sup>54)</sup>。

アコスタ自身は、「キリストの法<sup>のり</sup>」がローマ帝国

にやって来た時期を明確には述べていない。しかし周知のとおり、キリスト教は数百年の迫害の歴史を経て4世紀初頭には帝国内で公認され、同世紀末には国教化されたという経緯を持つ<sup>55)</sup>。ローマ人が外来宗教であるキリスト教を次第に受け入れていく過程と、スペイン人がアメリカ大陸の征服を目指して大西洋を越えて先住民と遭遇したタイミングとを重ね合わせることで、キリスト教伝播の偉大なる繰り返しが今まさに目の前で起きているのだと、アコスタは主張したかったのだろう。

また、インカの人々の中に古代ローマ人が行っていた慣習や信仰に共通する要素を見だし、同じくインカと古代ローマの同一性を強調しようという試みが『新大陸自然文化史』の中で次のように散見される。

このようなペルーの娘たちは、歴史家たちの記す、ローマの火の神に仕える処女<sup>56)</sup>によく似ている。これをみても、いかに悪魔が純潔を守る人々によって奉仕されることを望んでいたかが分かる<sup>57)</sup>。

このインカ・ユパンキとは、ローマのヌマ [ローマ第二代の王。暦法その他を制定したといわれる] のように、儀礼、儀式についていばんたくさん律法を定めた人である<sup>58)</sup>。

一方でアコスタは、ローマのパンテオンに相当する建築物がクスコに存在するとして、その様子を次のように説明している。

ペルーにある神殿、礼拝堂で、[パチャカマック<sup>59)</sup>] よりも重要なものとしては、クスコ市の、現在のサント・ドミンゴ僧院になっている場所にあったものがあげられる。今日でもなお残っている建物の切り石と石を見れば、ひじょうに大きなものであったことが分かる。その神殿は、ローマ人のパンテオンのように、すべての神々の館であり住家であった<sup>60)</sup>。

インカをローマと比肩させようという考え方には、アコスタのインカ称揚の意図と、インカと他の先住民を切り離して理解することの必要性を訴える気持ちが読み取れる。実際に彼は『新大陸自然文化

史』において、先住民を三つのタイプに分類し序列化することを提唱している<sup>61)</sup>。

まずはインカおよびアステカである。アコスタはこれらを「王国」(reino)や「君主国」(monarquía)と表し最も高い地位を与えている。第二に挙げられたのが、「居住地もしくは共同体」(behetrías o comunidades)とアコスタが定義した先住民集団である。このような場で暮らす先住民の間では政治的な取り決めが「合議の場」(consejo)においてなされる。戦争が起きると「軍事役職者」(capitán)が一時的に選ばれ、皆が彼に従う。平和時には住民もしくは「会議体」(congregación)が政治を司る。そして一般の平民層を統治する複数の「長」(principales)が合議体を構成する。こうした第二カテゴリーに分類された主要な先住民は、チリのアラウカーノ (araucano [現在はマプーチェ mapuche と呼ばれる])、ヌエボ・レイノ・デ・グラナダ (現在のコロンビア、ベネズエラ、エクアドルにまたがる領域)に存在したモスカ (mosca)、ヌエバ・エスパーニャのオトミ (otomí) などである。この第二カテゴリーの先住民たちは第一のインカやアステカに支配され、彼らの法律が適用され政体に編入されたおかげでより「強力かつ恵み深い政体」(gobierno más poderoso y pródigo)を獲得できたという。そして最後の第三カテゴリーに位置づけられたのが、最も卑しく劣った野蛮人と定義された人々である。具体的には「ブラジル人」(brasiles)として総称されたブラジルの先住民たちをはじめ、トゥピ語族に属する熱帯雨林地域で暮らすチリグアーノ<sup>62)</sup> (Chiriguano)、現在のフロリダ半島の先住民たちや、ヌエバ・エスパーニャのチチメカ<sup>63)</sup> (chichimeca) といった先住民たちが『新大陸自然文化史』の中で列挙されている。

このようにアコスタは、多種多様な先住民集団の中でもインカとアステカには王国もしくは君主国として別格の地位を与えて最も優れた第一カテゴリーとし、これに続く第二カテゴリーに分類された人々は、第一に服従させられたことにより政体が定着したとして、インカやアステカの偉大さを間接的に称揚した。そして第三カテゴリーに入れられた先住民たちには「非常に野蛮で」(totalmente bárbaro)、「法律も国王も定住地も持たず」(sin ley, ni rey, ni asiento)、「獰猛な野蛮人」(fieras salvajes)として、まるで動物の群れのように歩き回るだけの存在とい

うレッテルを貼りつけた。もちろんこうした序列化は、アコスタが先住民につけた一方的なものであり、差別的な意味合いが込められていた事実は否定できない。しかし前述のヴェスプッチが説いたような、あらゆる先住民が野蛮で獣同然とする見方と比べれば、アコスタの序列化は、先住民の文化や慣習をより微視的に差異化しようとする、ヴェスプッチとは一線を画する試みであり、同時代の他の一義的かつ人種差別的な見方と比べれば注目に値するのではないか。しかしだからといって、もちろんアコスタを手放しで称賛することはできない。

第二カテゴリーの先住民たちは、第一のインカやアステカの支配を受けたがゆえに「強力かつ恵み深い政体」を獲得できたというアコスタの考えは、彼を次の結論へと導いた。すなわち巨大な政体<sup>のり</sup>に支配された経験を有する先住民は「キリストの法をよく受取りやすい」という結論である。

先住民はその王や領主たちにすっかり従属していたからこそ、キリストの法をよく受取りやすい状態にあったのである。(中略)西インディアス(スペイン領アメリカ)で、主君にもっとも従属し、貢物にせよ、儀礼、葬儀の慣習にせよ大きな重荷を負っていたものほど、福音のためにふさわしい人たちはなかったし、またふさわしい人たちはないのである。メキシコとペルーの王たちの所有していた臣下たちは、今日ではもっとも深くキリスト教の教化を受けた人々であり、そのような地方では、政治行政にせよ教会行政にせよ、問題はない<sup>64)</sup>。

つまりアコスタは、先住民にキリスト教を定着させるにあたり、前述の引用史料にあるとおり、たとえ「大きな重荷」であったとしても、インカやアステカが実践していた政治理念、制度や体制を十分に活用することの必要性を説いているのである。

ところでアコスタは、先住民のキリスト教化にも役立つインカやアステカの政体は本質的に「専制・圧政」(tiranía)であったと述べている。例えば次の個所である。

野蛮人の野蛮さがいちばんよく表れるのは、政治や命令の与え方にあることは、周知の事実である。なぜなら、人間が理性に近づけば近づく



ほどその政治は人間味を増して威張ったところがなくなり、王侯貴族の地位にある者たちが、もっと臣下のいうことを聞き入れ、妥協するようになって、性質においては両者に違いはなく(中略)、ところが野蛮人の間にあっては、すべてが逆である。その政治は専制的で、臣下は動物のように扱われ、王たちは自分が神のように遇せられることを望む<sup>65)</sup>。

これをみても分かるように、彼ら(第三代皇帝のチマルポポカ Chimalpopoca 1397-1427 [在位 1415-1427])の治世下に生きたアステカの民)の間にあっては、王は絶対的な命令権や権勢を持たず、一種の王の顧問または執政官の助けによって治めていたのだ。ただし、もっと後になると、王の力が増すにつれて命令権も増大し、後世の王たちのように、純粋の圧政者になった。つまり、野蛮人の間にあっては、権力と命令権の関係は、常にかくのごときものであったのだ<sup>66)</sup>。

しかしアコスタは、『世界布教をめざして』では、次のようにアメリカ先住民、とりわけインカの人々の政治を「専制」として征服正当化の根拠とすることには批判的である。

先住民を統治し服従させる権原は、教会からの確かで最終的な委託にもとづくものであり、その及ぶ対象は包括的である。すなわち、すでに発見された先住民だけでなく、時間の経過とともにさらに発見されるであろう先住民にも適用される。この権原はなんらかの不正義によって歪められないかぎり、正当かつ妥当である。しかし、ある人びとは王権をことさら拡大させようとして、他にもいくつかの権原を持ち出しているが、わたくしにはそのような権原はいまひとつ合点がいけないばかりか、とうてい承認するわけにはいかない。具体的にはどのような権原が持ち出されているのかと言えば、インカ族は専制政治を行っていたということ、つまりインカ族は武力でこのペルーの国を奪い取ったということや、この地にはこれまで種々雑多な国(本稿ですでに言及したスペイン人がベエトリア behetría と呼ぶもの)が存在しただけで、本

来の意味での君主を抱く国というものがなかったというわけである。このような理由を挙げ、この地を統治する権原がキリスト教君主にあると主張するのである<sup>67)</sup>。

一方で前述のマンフォードによれば、ペルー副王トレドは、インカやアステカは専制・圧政であるがゆえに軍事征服しても構わないとする持論を展開していた<sup>68)</sup>。しかし同じくマンフォードは、トレドはこうしたインカの専制・圧政をアリストテレスの考えに倣って「臣民を微粒子化し交換可能な単位に還元する」(reducir a los súbditos a unidades atomizadas e intercambiables)の役に立つものとし、アンデス世界には適した政体とみなしていたと指摘している<sup>69)</sup>。つまりトレドにとって、円滑な植民地統治とは、専制・圧政的な政体の特徴を的確に把握し、これを巧みに活用する術を確立させることであった。

ところでアコスタは、このような専制・圧政的な政体でありながらも、秩序を有しているがゆえにインカやアステカはレプブリカ(república [スペイン語で「国」もしくは「国家」の意])であるともみなしている。

私が思うに、(先住民はすべて野蛮であるという)このひどい偏見を打ち砕くのもっともよい方法は、先住民が、自分たちの法のもとに暮らしていた時代に持っていた、秩序と行動の様式を知らしめることである。それらの点に関し、彼らが多くの野蛮なこと、根拠を欠いたものごとを持っていたにせよ、驚嘆に値する他の多くのものがあったことも事実であり、そうしたことから、彼らが立派に教育されうる自然の能力をそなえ、われわれ[キリスト教徒]の国々の多くの者よりは、いろいろな点でまさっていることが分かるのである。にもかかわらず、彼らが大きな間違いを混入させているのは、なんら驚くに値しないことなのだ。つまり、もっとも尊敬さるべき政治家や哲学者、たとえばその中にリュクルゴスやプラトンを含めてすら、大きな誤りはあるものである。また、もっともすぐれた国家(las más sabias repúblicas)、ローマ人、アテナイ人の国家においてすら、嘲笑をさそう無智は存したのであり、メキシコ人やインカの国(las repúblicas de los mejicanos y

de los Ingas) のことが、もしローマ人、ギリシア人の時代のもので報告されたとしたら、きっとその法や政治は尊敬されたことだろう<sup>70)</sup>。

私は確認するが、新大陸のほとんどすべての人々や地方は同様にして進展してきたのである。つまり、はじめのうちは、野蛮な人たちであったが、狩猟によって生計をたてていたために、もっとも荒れ果てた地方へ入ってゆくうちに、新しい世界を発見した。そして、ほとんど動物のように、家もなく、天井もなく、畠もなく、家畜も、王も、法も、神も、理性もなしに暮っていた。そのうち、ある人々が、新しい、より良い地を求めて歩き、良い土地に住みつくようになり、秩序と清潔さと、国としてのあり方を、原始的ながらも持ちはじめた。そしてそののち、その同じ人たちの中から、またはもっと別の人たちの中から、他に抜きんでて気力と知にあふれた人たちが、力の弱い者たちを服従圧服させはじめ、ついには大きな王国や帝国を作った。メキシコにおいても、ペルーにおいてもそのような事情だった。そして、あの「新大陸の」未開人たちの間で、都会や国のあるところ (donde quiera que se hallan ciudades y repúblicas fundadas entre estos bárbaros) ではどこでも右の経過をたどったのである<sup>71)</sup>。

このレプブリカという考え方は、以下で詳しく論じるとおり「計画都市」という概念とも深く結びついており、これまで論じてきた「ポリシア」ともつながるキーワードである。以下ではこの問題を深く検討し、近世のスペイン人がインカをいかにしてポリシアやレプブリカと関連づけて有用な価値を見出そうとしていたのかをみていこう。

## 2. 新旧両世界におけるレプブリカと計画都市

### 2-1. ヨーロッパ思想におけるレプブリカ

スペイン領アメリカには二つのレプブリカが存在していたとよく言われる。すなわちスペイン人のレプブリカと先住民のレプブリカである。網野徹哉はこの語を適切に訳すことは難しいと断りを入れつつも、敢えて訳すならば「政体」が望ましいと述べている。二つのレプブリカの存在を定義づけたのはア

メリカ大陸の征服者であったスペイン人である。支配者である自分たちが安全かつ快適に暮らすレプブリカは「ヨーロッパ系白人の居住空間であり、住民は、広場を絶対的な中心とし、格子状に張りめぐらされた街路によって区画される「都市」に居住すると同時に、政治組織としての市参事会 (カビルド) によって統制」されるのが理想とされた。これに対して先住民のレプブリカは、「都市の背後に広がる山岳などに住む先住民によって構成」され、先住民に「特化された法と合議機関 (村会) をもち、表面的には先スペイン期の社会構造と自律性を維持するが、もっぱらもうひとつのレプブリカ (スペイン人のレプブリカ) のために、人的エネルギーを供給する源として把握される空間」とされた<sup>72)</sup>。

先に取り上げたマンフォードは、レプブリカと呼ばれた空間には「組織化された」というニュアンスが含まれることも指摘している<sup>73)</sup>。このような考え方には、そもそも人間という生き物は都市環境に住んで規則正しい社会生活を送るものであり、その一方で、そのような場所、すなわちレプブリカで暮らしていない生き物は動物もしくは野性的な未開人にすぎないという意味合いが込められていた<sup>74)</sup>。先の網野の指摘に従えば、スペイン人のレプブリカは「広場を絶対的な中心とし、格子状に張りめぐらされた街路によって区画される「都市」」である。この定義に従えば、先住民のレプブリカにも、ペルー副王トレドによって人工的に造られた「区画整理され組織化された空間」であるべきというニュアンスが付随しており、このような空間で暮らす先住民たちにはスペイン人が理想とする慣習や文化、生活様式を備えることが期待されたのである。

近世イベリア半島のスペイン人たちがレプブリカという言葉に込めた意味は同時代の史料を元に推測できる。例えば 1543 年 10 月 23 日、スペイン北部のブルゴスで同市の司教座聖堂参事会 (cabildo de la Catedral) が出した証書 (escritura) の中の文言に注目したい。ここでは、司教座聖堂参事会がブルゴス市の評議会 (regimiento) にサン・ルカス施療院内の一室を 1 年間にわたり譲渡することが明記された。目的は幼児に対する教理教育である。孤児と化した幼児たちが街にあふれかえる現状は、ブルゴス市にはもちろんのこと、「市内のレプブリカにとって有害であるため」 (muchos daño e perjuicio de esta ciudad e república de ella)、施療院の一室を使っ



て孤児たちを収容し、キリスト教教理を教えるべしというのが証書に明記された文言であった。そして場合により幼児に対する処罰が容認された<sup>75)</sup>。

レプブリカに組織化された秩序を与える具体的方法は、人間の居住地を碁盤目状の計画都市として人工的に作り変えることだった。スペイン領アメリカにおいては、縦横一直線にのびたグリッドラインの形状を持つ植民都市の建設が征服初期の16世紀初頭から数々の王令を通じて命じられた<sup>76)</sup>。宗主国スペインでは、バリャドリッドに対して1592年に、マドリッドには1617年にフェリペ2世の王令が発せられ、既存の市街地を破壊した後に均等の四角形の構造を有するマヨール広場 (Plaza Mayor) が建設された。ラモン・グティエレス (Ramón Gutiérrez) はこうした例を植民地での経験が本国に影響を及ぼした帰結とみなしている<sup>77)</sup>。

スペイン人がグリッドラインに基づくこうした計画都市を植民地に導入した理由は、20世紀中葉の段階では専門家の頭を悩ます「なぞ」(puzzle)であった<sup>78)</sup>。確かに前述のブルゴス近郊のブリビエスカ (Briviesca) をはじめ、スペインの北部や中央部には13-14世紀頃の建設と推定される碁盤目状の形態の街並みが残っている<sup>79)</sup>。また14世紀のカタルーニャ地方では、フランシスコ会士フランセスク・アシメニス (Francesc Eiximenis 1330?-1409) が1379-1392年の間に百科事典『ロ・クレスティア』(Lo Crestià [カタルーニャ語で「キリスト教徒」の

意])を編纂し、この中で規則的かつ人工的な都市計画論を展開していた<sup>80)</sup>。しかし植民地征服事業に関わったスペイン人の多くは南部アンダルシアの出身であり、同地には規則的構造を持った街区は元来ほとんど存在しない。にもかかわらず、アンダルシア出身のスペイン人を主体としてグリッドラインに基づく街並みがスペイン領アメリカで矢継ぎ早に建設されていったのはなぜなのか。

この問題を思想史の観点から探るうえで、近世イベリア半島から目を移し、15世紀中葉から16世紀にかけてのイタリアに注目したい。ここではルネサンスが花開き、古典古代の知識人が唱えた理論や思想を現実社会に再現しようとする動きが高まっていた。こうした知的風土の中でレオン・バットISTA・アルベルティ (Leon Battista Alberti 1404-1472) の『建築論』(De re aedificatoria) は注目に値する。彼は古代ローマの建築家ウィトルウィウス (Vitruvius 80-70?BC-15?BC) の『建築十書』(De architectura libri decem) を参考にしつつ、都市を組織化するための重要な要素として街路、広場、建物を挙げた。そしてこれらを個別の機能に応じて秩序よく配置することの必要性を唱え、都市全体の調和を重んじた。アルベルティ以前のヨーロッパではいわゆる「新エルサレム」(New Jerusalem)などの都市図像にみられるように、完結性と完全性を内包する人間の生活空間はあくまでも理念上の聖なる都市にすぎなかった。しかしアルベルティ以降、都市は規則性と対称的配置を有する完全なる形態として現実世界に出現したのである<sup>81)</sup>。

『建築論』におけるアルベルティの指摘には、都市が機能的であるためには「健康的かつ温和な気候で、給水に便利な防衛しやすい場所」に建てられなければならない、その内部は「明確に配置され、通りは込み合わないよう十分に広く、しかもあまり暑くならないように、広すぎてもいけない」とある<sup>82)</sup>。加えて同著の第4巻においては「都市は、市民の自由を守り、敵の侵入を防ぐために城壁で囲まなければならない(中略)都市の輪郭と内部の部分配置は、場所によって変化する(中略)しかし、理想的な都市の形態あるいは輪郭は、最も防衛に適し、広々とした円形である<sup>83)</sup>」と書かれ、アルベルティが都市構造に均質なプロポーションを求めていることがわかる。

残念ながらアルベルティは、彼が理想とした都市

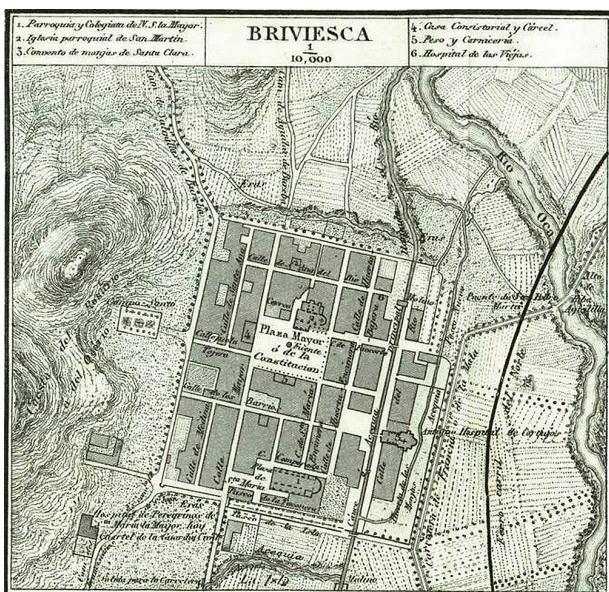


図1 ブリビエスカ (1868年)

出所: [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mapa\\_de\\_Briviesca\\_\(1868\),\\_por\\_Francisco\\_Coello.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Mapa_de_Briviesca_(1868),_por_Francisco_Coello.jpg)



がいかなる構造を有するのか、その形を視覚的に伝える地図を残さなかった。しかし彼と同時代に生き、また親交もあったフィレンツェ生まれの建築家フィラレーテ (Filarete [ギリシア語で「徳を愛する者」の意]) ことアントニオ・ディ・ピエトロ・アヴェルリーノ (Antonio di Pietro Averlino もしくは Averulino 1400-1469) は、『建築論』(*Trattato di architettura* 1461-1464 年頃) の中で、スフォルツィンダ (Sforzinda) という架空都市について言及し、これはアルベルティが夢見た理想都市の再現とされている。河原温は、「円形と8つの先端をもつ芒星形から構成される城壁をもち、放射状の街路システムが都市の中心広場から城壁へ向かって伸びる構造を持つ」のがスフォルツィンダであると簡潔に定義して、次のように詳細な説明を加えている。

それ (スフォルツィンダ) は、「自然に成長した」中世都市に対して、規則性と自然の秩序との調和を備えた新たな都市計画を提示するものであった。彼 (フィラレーテ) の理想都市計画は、15 世紀のイタリア都市国家の既存の政治的、社会的秩序を機能的に取りこむとともに、市民の誇りと人間の尊厳を強調していたのである。と同時にそこでは、中世都市に内在していたキリスト教的、宇宙的・宗教的なシンボリズムも失われてはいない。スフォルツィンダの中心広場には市庁舎とともに聖堂が配されてお

り、その聖堂の円蓋は、太陽の形をした神のモザイク画によって覆われていた。そして、その円蓋の下には、季節と自然の諸元素のシンボルによって囲まれた「土地と水路」の地図が刻まれていた (『建築論』第9巻)。風向きと防衛が考慮されていたスフォルツィンダは、また機能的都市の原型をなし、多様な職種・身分の人びとの居住空間と市場、公共浴場などの合理的配置において (中略)、近代都市計画の技法を初めて提示したものと見る事ができるのである<sup>84</sup>。

さらに河原によれば、アルベルティとフィラレーテによって提示された理想都市のモデルは、画家であり建築家のフランチェスコ・ディ・ジョルジョ・マルティーニ (Francesco di Giorgio Martini 1439-1501) やレオナルド・ダ・ヴィンチ (Leonardo da Vinci 1452-1519) に受け継がれ、16 世紀以降のイタリアで都市建設の際に重視される軍事・防衛的な機能を持つ要塞都市の設計へと発展していった。現代にも残るこのような都市の例として、イタリア北東部のパルマノーヴァ (Palmanova) が挙げられる。人口 5500 人程度の小規模都市だが、16 世紀末に時のヴェネツィア共和国の建築家ヴィンチェンツォ・スカモッツィ (Vincenzo Scamozzi 1548-1616) によって設計されたもので、星形の形態を有する要塞

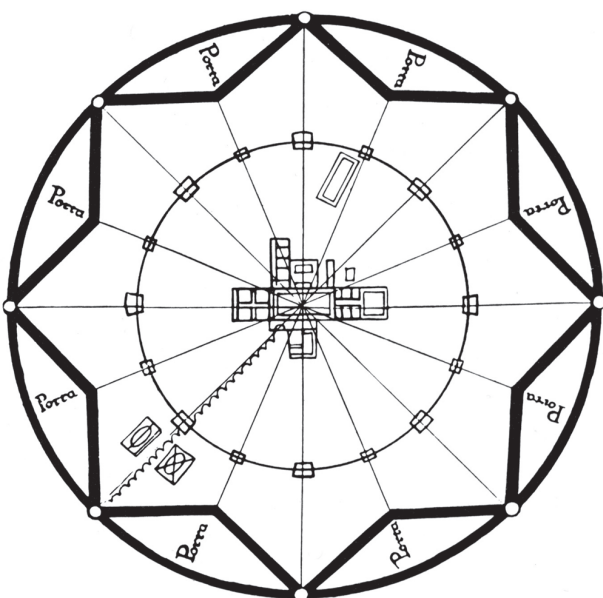


図2 スフォルツィンダ

出所：<https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Idealstadt.jpg>



図3 パルマノーヴァ

出所：[https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Palmanova\\_aerea.jpg](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Palmanova_aerea.jpg)

都市の典型である。そしてこのような星形の都市の設計がイタリア北部はもちろんのこと、ヨーロッパ全域で広く18世紀まで主流となるのである。

こうしたブームの背景には、大砲をはじめとする15世紀末以降の火薬の爆発力を用いた火器の発達によって中世以来の都市が構造的な欠陥を露呈し始めたこととも関連している。都市の要塞化は、近世以降の南ネーデルラントの商業都市アントウェルペン（Antwerpen）に起きた現象を典型例として、アルプス以北の中世都市の形態も大きく作り替えていった<sup>85)</sup>。

加えて、イタリアを中心に発展した古典古代の思想に基づく計画都市の構想はアルプス以南にも波及し、その波は中世後期から近世にかけてのスペイン南部アンダルシアにまで達した。その帰結は、およそ800年にわたってイスラーム教徒と断続的に行われてきたレコンキスタの最終局面、グラナダ戦役最中の1491年にスペイン人が建設した前線基地サンタ・フェ（Santa Fe [スペイン語で聖なる信仰の意]）に設けられた碁盤目状の街路である<sup>86)</sup>。美術史家ギジェルモ・トバル・デ・テレサ（Guillermo Tovar de Teresa）は、イスラーム教徒との戦いのシンボルにもなったこのサンタ・フェが、さらには遙か遠いアメリカ植民地において都市建設のモデルになったとみている<sup>87)</sup>。

歴史的事実の興味深い連関を幾つか挙げれば、グラナダの戦いで指導的な役割を果たしたイニゴ・ロペス・デ・メンドサ（Íñigo López de Mendoza y Quiñones 1440-1515）はイスラーム教徒から奪還直後のグラナダの初代総督に就任した人物であり、その息子のアントニオ（Antonio de Mendoza y Pacheco 1490もしくは1493-1552）は初代ヌエバ・エスパーニャ副王に就任した（任期1535-1550）。

そして彼がスペインから赴任地へ携えてきたのが先に述べたアルベルティの『建築論』であった事実は大変に興味深い。副王メンドサの蔵書の一つであったこの本は現存しており、幾つかのページに残された自筆の書き込みから判断すれば、彼は赴任間もないメキシコの地で同書を読了したことがわかる<sup>88)</sup>。岡田裕成は、「スペインの大貴族で、人文主義的な教養人として知られた彼（副王メンドサ）は、メキシコ市の先住民首長の子弟の高等教育のための学院や、植民地最初の大学をメキシコ市に創立するなど、「新世界」の任地において、みずからの理想にもとづく社会の建設に乗り出していた。都市建設という大事業が、この人文主義知識人にとって、ある種ユートピア的なヴィジョンの実現だったことは大いにありうる」と述べ、中世後期から近世にかけての新旧両世界で起きた知的な連関を的確に指摘している<sup>89)</sup>。またフランシスコ・セルバンテス・デ・サラサル（Francisco Cervantes de Salazar）が1554年にラテン語で出版した著作の中では、メキシコ市内の建築物の柱は「ウィトルウィウスが勧めているように丸くなっている」と説明されている<sup>90)</sup>。さらにはフェリペ2世が植民地の都市設計に関して1573年に公にした命令文と、先に述べた『建築十書』としても知られるウィトルウィウスの『建築について』（*De Architectura*）の内容を比較した研究では多くの類似点が指摘されている<sup>91)</sup>。

さらなる興味深い連関を指摘したい。アメリカ植民地にてスペイン人入植の拠点となったのが現在のカリブ海のドミニカ共和国の首都サント・ドミンゴ（Santo Domingo）であることはよく知られているが、同市は1496年に発足したのち、1502年には総督ニコラス・デ・オバンド（Nicolás de Ovando 1460-1511）の主導の下でグリッドラインに基づい

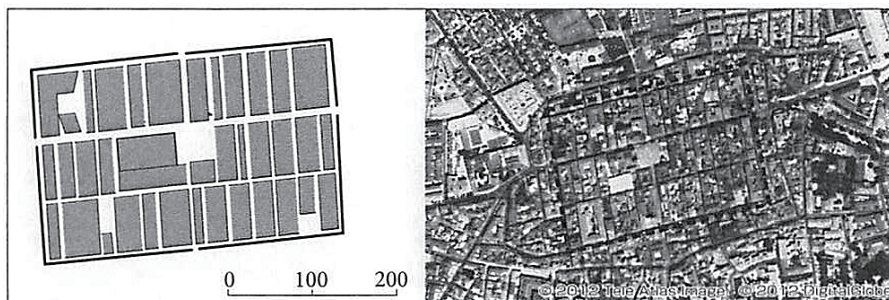


図4 サンタ・フェ

出所：布野修司、ホアン・ラモン・ヒメネス・ベルデホ『グリッド都市—スペイン植民都市の起源、形成、変容、転生—』京都大学学術出版会、2013年、48頁。



て再整備された<sup>92)</sup>。このオバンドは、先のグラナダ近郊の軍事前線基地サンタ・フェに駐屯して多数の兵士を率いた軍人としても知られている<sup>93)</sup>。

こうしてサント・ドミンゴの建設に導入された都市計画は後に大陸部へと広がっていった。1513年、カトリック両王の一人フェルナンドは、ペドラリアス (Pedrarias) というあだ名でも知られるペドロ・アリアス・ダビラ (Pedro Arias Dávila 1440-1531) に中央アメリカ海岸部の探検を一任し、入植に際しては「整ったように見える村」(el pueblo parezca ordenado) を建設するようにと命じている<sup>94)</sup>。この種の命令は17世紀へと引き継がれた。同世紀のリマで暮らしたフランシスコ会士のブエナビエンタ・デ・サリナス・イ・コルドバ (Buenaventura de Salinas y Córdoba 1592-1653) は、1630年にリマで刊行した書物の中で、生地である同市の通りが「等しさ、横幅、まっすぐさ」(igualdad, y anchura y rectitud) を備えており、リマは「並外れた美しさ」(singular belleza) が息づいた都市と称賛した<sup>95)</sup>。

## 2-2. スペイン人と接触以前の先住民が実践していたレプブリカ

ところで興味深いことに、グリッドラインに基づく都市計画はヨーロッパ人だけの専売特許ではなかった。近世のスペイン人たちが秩序を持つと高く評価したアステカやインカも、いわゆる計画的な都市の建設を征服以前から実践していたのである<sup>96)</sup>。

アステカの首都テノティティラン (現在のメキシコ市) については、メンドサ絵文書 (Códice Mendoza) と呼ばれる征服後の1540年頃に作成された同市の創建神話を図解する細密画の分析に基づいて、この都市が二本の対角線が貫通した長方形の構造を有していた可能性が指摘されている。正方形もしくは長方形という形は中央アメリカの先住民たちの思考にとって特に重要であり、こうした重要性は彼らの暦にも表れている<sup>97)</sup>。

また現在のメキシコ市南東、プエブラ州中西部に位置するサン・ペドロ・ Cholula (San Pedro Cholula) には、グリッドラインに等しい街路が征服以前から整備され、チナンパ (chinampa) と呼ばれたアステカの伝統的な農法によって整備された耕地や宅地を作る際、規則的な街路計画が実践されていた<sup>98)</sup>。さらにテノティティラン誕生前の紀元前2世紀から紀元後6世紀にかけて繁栄した宗教都市



図5 メンドサ絵文書

出所: [https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e2/Codex\\_Mendoza\\_folio\\_2r.jpg](https://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/e/e2/Codex_Mendoza_folio_2r.jpg)



図6 ペドロ・サンチョの記録 (1606年) のイタリア語版に付せられた空想的なクスコの街並み

出所: [https://commons.wikimedia.org/wiki/File:1565\\_Cusco\\_Ramusio\\_Delle\\_Navigazioni\\_vol3\\_pp411-412.png](https://commons.wikimedia.org/wiki/File:1565_Cusco_Ramusio_Delle_Navigazioni_vol3_pp411-412.png)

テオティワカン (Teotihuacán) については、等間隔とは言えないものの、建造物と街路の配置は直角的であり、この特質は居住区域にも認められる<sup>99)</sup>。

インカについては、1606年出版のペドロ・サンチョ (Pedro Sancho de Hoz 1514-1547) の記録のイタリア語版に挿入された空想的なクスコの整然とした挿絵が有名である<sup>100)</sup>。同市を上空から見るとアメ



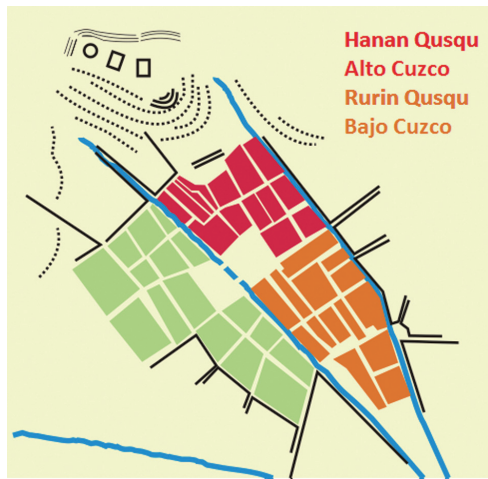


図7 アメリカライオン (puma) の形状を有するクスコの街並み

出所: <https://commons.wikimedia.org/wiki/File:Cuzco-antiguo.png>

リライオン (puma) の形をしていることは今日よく知られている。アメリカライオンの形状が人工的に形成されたことは明白であり、クスコは征服以前より完全なる計画都市だったと言える<sup>(101)</sup>。

そしてさらには、リクワートの次の指摘を考慮すれば、征服以前のアメリカ大陸には近世スペイン人が重視した「ポリシア」を有する様々な先住民が存在していたことになる。言うなれば先住民たちは、彼らなりのポリシアとレブブリカを征服前から実践していたのであり、この意味でも、彼らすべてをひとくくりにして「無秩序」とする見方がいかに乱暴であったかもわかる。

ティカルやウシュマル、あるいはチチェン・イツァのようなマヤの敷地を何気なく調べてみると、マヤの外部空間が、方形の四辺に並び隅角は開いたままにしている諸独立建物のなかにそれを囲い込むことによって作り上げられているその仕方がわかるだろう。この種の囲い込みはティアワナコ文化（ペルーやボリビアで栄えた前インカ文化）において、宮殿の幾つかでも、また、主要な空間のあるものでも（初歩的な仕方でも）あきらかにみられるのである。メキシコやホンジュラスやグアテマラのさまざまな文明においてたいへん重要なものであるこの空間の分割と中央アメリカの時間の分割との関係は、〔ここでも〕あきらかにきわめて重要であった<sup>(102)</sup>。

### 3. レドゥクシオン

#### —ポリシアとレブブリカ実践の場—

先にペルー副王トレドやイエズス会士アコスタがインカの統治形態は専制・圧政でありつつも先住民の統治に適すると評価していたことを論じたが、このような政体は、ジェームズ・スコット (James C. Scott) の言葉を借りれば「権威主義的な高度近代主義」(authoritarian high modernism) に相当する。この意味は、国家がすべてを把握して国民生活に関わるすべての責任を負うという考えである<sup>(103)</sup>。またアラン・ダーストン (Alan Durston) は、ミシェル・フーコーが論じた円形刑務所に関する議論、すなわち全展望監視システム (Panopticon) に関する議論を、トレドやアコスタがインカの統治形態をなぜ理想的とみなしたのかを考えるのに役立つと指摘している<sup>(104)</sup>。さらに先に述べたマンフォードは、帝国がすべてを管理すべきという考え方は征服よりはるか以前のインカ古来のものであったと副王トレドが考えていた可能性を示唆している<sup>(105)</sup>。

実際に国王フェリペ2世宛ての報告書の中で、トレドは人間を統治することを「監視」とみなし、またこの形態が理想と考えていた<sup>(106)</sup>。そして「監視的な統治」の実践の場が他ならぬ先に述べたレドゥクシオン (先住民集住政策) だったのである。

ペルー副王領全域でレドゥクシオンを実践するにあたってトレドが大きな期待を寄せたのが、自身の知能顧問団とでも言うべき学識豊富な側近たちであり、レドゥクシオンとの関係で特筆に値するのがプラタ市 (Ciudad de La Plata [現在のボリビアのスクレ Sucre]) の高等法院 (Chancillería) の裁判官 (oidor) のフアン・デ・マティエンソ (Juan de Matienzo 1520-1579) である<sup>(107)</sup>。

マティエンソの思想の根幹は彼が1567年に著した『ペルーの統治』(Gobierno del Perú) の第1部、第14章において、次に示した図版と共に明確に示されている<sup>(108)</sup>。彼が目指したのは「規則正しさ」を布教区の隅々にまで行き渡らせることだった。そのためには、まず正方形もしくは長方形の広場を中心にして街区が設けなければならない。そして四辺のうちの一辺には聖堂が建てられ、残りの三辺には先住民に割りあてるための住居が整然と建設されなければならない。先住民の住居は縦横垂直にひかれた通りに沿って規則正しく建てられなければならな

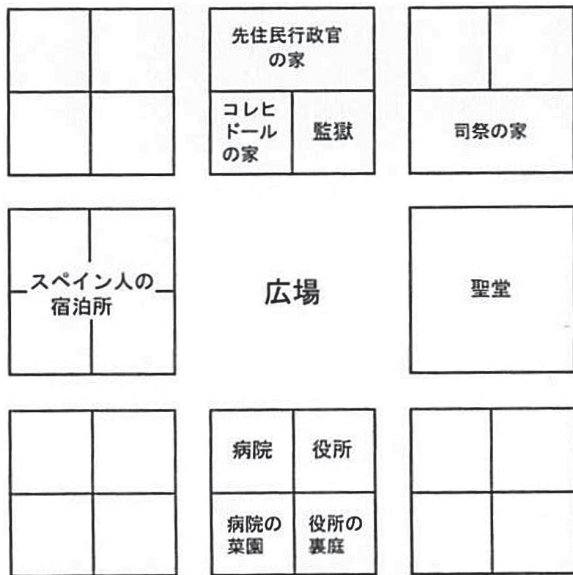


図8 フアン・デ・マティエンソが考案した「秩序づけられた」布教区（1567年）

出所：岡田裕成・齋藤晃『南米キリスト教美術とコロニアリズム』名古屋大学出版会、2007年、77頁。

い。前述の副王トレドがフェリペ2世に宛てた報告書に記されている「スペイン人たちが暮らす土地の外観に従って」（conformes a la traza de los lugares de españoles）という一節から判断しても<sup>(109)</sup>、布教区内部に設けられるべき街区の構造は、スペイン人自身が暮らす都市空間をデザインするのに用いられたグリッドラインそのものである。従って布教区を上空から見れば碁盤目状の形態を有していることが明白である。換言すれば、スペイン人がアメリカ植民地に都市を建設する際の「アイデア」そのものが、布教区の建設にも導入されているのである<sup>(110)</sup>。

この議論と関連して興味深いのは、征服以前のインカが築いたインフラを副王トレドが布教区の建設に活用していた事実である。スティーブン・ワーネキー（Steven A. Wernke）は自著『交渉を経ての入植』（*Negotiated Settlements*）の内容を紹介した概論の中で、現在のペルー南部アレキパ県のコルカ渓谷（Valle del Colca）、ヤンケ（Yanque）、ラリ（Lari）、カバナコンデ（Cabanaconde）といった地域において布教区が、インカの行政センターの上、もしくはその近くに建てられていた事実を考古学的な発掘調査を元に指摘している<sup>(111)</sup>。例えばコルカ渓谷にはインカ時代の中央広場や宗教儀礼を行うために作られた石造建築物ウシュヌ（ushunu）が存在し、帝国中央と地方社会とのつながりを維持・強化するための各種儀礼が定期的に行われていた<sup>(112)</sup>。

こうした興味深い指摘が出てくるようになったのは近年のことである。5年に及ぶ総巡察（1570-1575）を経て1000もの布教区の建設を命じたトレドの政策に対して、研究者たちは長い間「失敗」という評価を下してきた<sup>(113)</sup>。多種多様な先住民集団を布教区という秩序づけられた空間に格納してキリスト教化し、スペイン人が理想とする文化様式を植えることで、最終的には安定的な租税の徴収が期待されたわけだが、結果として、布教区での生活に嫌気がさした先住民の頻発な逃亡を惹起してしまった。こうした帰結が布教区の「失敗」という評価が導かれた一因だった。トレドの後任のペルー副王が前任者の政策を厳しく批判したこともこのような否定的な評価へとつながったのだろう。逃亡先住民たちは「よそ者」（forastero）と総称され、植民地社会の治安を乱す根無し草的な存在として蔑視の対象となった<sup>(114)</sup>。

近年、トレドのレドゥクションを「成功」もしくは「失敗」という二項対立的に捉える従来の見方を批判的に検証し、トレドが退いた後もアンデス地域の先住民に長きにわたり多大な影響を及ぼしたレドゥクションの帰結を明らかにしようとする研究が進行中だが<sup>(115)</sup>、前述のワーネキーの研究はこの潮流に位置づけられる。トレドのレドゥクションの成功・失敗を議論するよりも、彼が実践したレドゥクションが他の地域や時代にどのように伝播し受け継がれていったのかという観点から研究を進めることは有益だろう。こうした事柄の一例として、イエズス会士が南米大陸高地のアンデスならびに低地のラプラタ地域で16世紀後半から18世紀後半にかけて行ったレドゥクションが挙げられ、この政策の実践にポリシアやレプブリカという本稿の中核的な議論に関わる思想が時空間を超えて長期的かつ持続的に受け継がれていたことを論じておきたい。

ペルー副王トレドとイエズス会士とのレドゥクション共同実践の場として引き合いに出されるのが（1）リマ市内に建設された先住民収容施設セルカド<sup>(116)</sup>（Cercado）、（2）リマ東部のワロチリ<sup>(117)</sup>（Huarochiri）、（3）現在のペルーとボリビアの国境に位置するティティカカ湖畔のフリ<sup>(118)</sup>（Juli）である。特に（3）のフリについては、17世紀後半の記録では、「私たちイエズス会士の先住民たちが育成された『アルマス広場』（plaza de armas）」、すなわち「中心地」と呼ばれており<sup>(119)</sup>、後述するように、フリが

モデルケースとして17世紀以降のラプラタ地域における名高いイエズス会布教区へと受け継がれていったことを示唆している。

(1)から(3)までの事例すべてに共通するのはアコスタの関与である。インカをはじめ高水準の文化を元々有していたとみなされた先住民の存在を前提とし、こうした遺産や伝統をキリスト教布教の進展に活用しようとアコスタが諸論考を公にしたことは本稿で議論してきたとおりである。セルカド、ワロチリ、フリという三つの現場は、アコスタ自身の、もっと言えば彼の布教方針を指令として仰いだ同僚たちの活動実践の場であった<sup>(120)</sup>。

フリへのイエズス会の到着は1576年、翌1577年には学院が建設された。1581年には後の初代パラグアイ管区長ディエゴ・デ・トーレス・ボーリョ(Diego de Torres Bollo)が上長(Superior)に就任し、5年以上にわたり同職の任にあたった<sup>(121)</sup>。

フリとパラグアイ管区のイエズス会布教区との連関を示唆する確固たる証拠は、管区長就任から程なくしてトーレスが布教区の建設に携わる同僚たちに出した命令である。四角形の中央広場を中心に広くまっすぐな街路を設けよという命令の第8条は、本稿で取り上げた中世後期から近世にかけてのヨーロッパでもてはやされた理想都市の構造に他ならない。そして同じく第8条には、ペルーでの「やり方」(modo)に従って布教区内部の街路や区画を線引きするようにとある<sup>(122)</sup>。この「ペルー」がフリであることは間違いないとして今日の専門家の間では認識が共有されている。例えば作者不詳の『ペルー管区イエズス会年代記』を編纂したフランシスコ・マテオス(Francisco Mateos)は、トーレスをはじめ、アロンソ・デ・バルサナ(Alonso de Barzana 1528-1598)やフアン・ロメロ(Juan Romero)など、後にパラグアイ管区で布教区の建設と運営に深く携わるイエズス会士がフリで先住民改宗のための方法論を学んでいたことを根拠として、フリとラプラタ地域のイエズス会布教区には多くの近親性(afinidad)が認められると述べている<sup>(123)</sup>。つまり前述のインカと、ここで論じているフリならびにラプラタ地域のイエズス会布教区には、整然とした街路という強い連関が見いだせるのである。

布教区の物理的な構造に加えて、その経済基盤を確かなものとした土地制度についても、インカとラプラタ地域のイエズス会の活動の類似を示唆する点

がある。先の「1-3. イエズス会士ホセ・デ・アコスタがインカに見いだしたポリシア」で言及した研究者デル・ピノは、「自分は無知であるが」と譲歩しながらも、ラプラタ地域のイエズス会士たちが布教区を運営する際にアコスタの『新大陸自然文化史』の第6巻12-18章を参考にしていたのではないかと推測している<sup>(124)</sup>。彼がこの推測の根拠としたのがフアン・カルロス・ガラバリア(Juan Carlos Garavaglia 1944-2017)が著した、ラプラタ地域のイエズス会士たちが携わった大規模なマテ茶貿易が世界経済に与えた影響を論じた大著と、これに関するもう一つの短い論稿だが<sup>(125)</sup>、特にラプラタ地域のイエズス会布教区を経済面で支えた二つの土地制度、アバンバエ(abambaé)とトゥパンバエ(tupambaé)が、インカが設けていた「インカの土地」、「太陽神の土地」、「共同体の土地」という土地制度を想起させることを指摘しておきたい。

詳細な議論は今後の研究に委ねるが、一般にアバンバエが「人間の土地」、トゥパンバエが「神の土地」と区別され、前者における収穫物はその土地を耕作した当人たちによって日常生活で食され、後者では飢饉の際の緊急食糧や、孤児や未亡人といった身寄りのない人々に対する支援物資が生産された<sup>(126)</sup>。他方インカについては、「インカの土地」や「太陽神の土地」における労働奉仕が納税の役割を果たし、そこでの収穫物は宗教行事にも使われた<sup>(127)</sup>。このように名称や機能の面において、インカとラプラタ地域のイエズス会布教区の土地制度には興味深い類似点がある<sup>(128)</sup>。

さらに先のジェームズ・スコットに言わせれば、インカの政体は「権威主義的な高度近代主義」であり、国家がすべてを把握して国民生活のあらゆる側面に対して責任を負うわけだが、こうした特徴は同じくイエズス会布教区にも認められる。例えばフリでは、住民に対して「永続的な監視と注意」(perpetua vigilancia y cuidado)が重視され、「継続的に体罰を加えること」(continuo macear)も容認されていた<sup>(129)</sup>。また布教区内にはフィスカル(fiscal)と呼ばれる役職担当の先住民が存在し、その職務は住民の監視であった<sup>(130)</sup>。こうした監督行為は、キリスト教的な価値観や行動様式に反する先住民を矯正するのに導入された、言うなれば荒療治だが、強権を駆使してでも監督下の人間の一举一動に気を配り、時には大鉈を振るうという政策は、ペルー副王トレ



ドがインカの政体を専制・圧政とみなしつつも、先住民の統治にはそうした強権が欠かせないと結論づけたこととも一致する。

しかしながら、こうした「権威主義的な高度近代主義」が先住民の統治や改宗を目的として重視されていた一方で、ある種の「先住民自治」の重要性も、近世スペインの知識人の間で広く共有されていた事実を付言しておきたい。本稿の導入部「はじめに」の前に挿入したアコスタの『新大陸自然文化史』からの一節には実は続きがあり、全体では次のようになっている。

先住民の法、慣習、行政等について知ることから得られるもうひとつの目的は、それらのもの自体を利用して彼らを助け、彼らを統治することである。つまり、キリストの掟や聖教会の教えにそむかない限りにおいては、先住民は、彼らの特別の法—彼らの自治体法のごときものによって統治されるべきなのである<sup>(130)</sup>。

「彼らの自治体法のごときものによって統治されるべき」という一言に、先住民の在来の文化や慣習を植民地主義的な暴力によって根こそぎ排除しようとする意図を読み取るのは難しい。むしろこの一言の含意としては、「はじめに」でも言及した内堀や鈴木が指摘する「資源化」の考えが反映されてはいないだろうか。

## おわりに

本稿の2-2で取り上げたリクワートは、『「まち」のアイデア』のペーパーバック版（1988年出版）に加えた「新しい序」において、ジョン・ナイハルト（John G. Neihardt）著の『ブラック・エルクは語る』（Black Elk Speaks）に言及し<sup>(132)</sup>、次のように述べている。

これは、白人が、シャーマン予言者のもとにある人びとを正方形の家屋のなかに住まわせることによって、彼らのもつすべての力を巧みに破壊してしまい、そのため彼らは自分たちがその物理的環境とその円形の世界像とのあいだの調和からひき出していた健康と活力を断たれてしまったその方法に対するシャーマン予言者の狼狽を記述したものである。ここにいう彼らの円

形の世界像は次のようである。「われわれのティーピー〔テント小屋〕は鳥の巣のように丸かったのです。これらはいつでも円の形に設けられていました。この円は部族の<sup>たが</sup>鐘であり、偉大なる<sup>ふ</sup>霊がわれわれに子供たちを<sup>か</sup>孵化させるたくさんの巣のうちの一つの巣でありました<sup>(133)</sup>…」

この引用は、一般にラコタ（Lakota）として知られる米国サウスダコタ州の先住民オグララ・スー（Oglala Sioux）に関する記述である。ヨーロッパ人による植民地主義的な暴力のもとで人工的な家屋に押し込められた彼らが心身を病んでしまったことが指摘されている。

ナイハルトのこのような議論との関連で想起されるのが、アメリカの哲学者エドワード・ケーシー（Edward S. Casey）が『場所の運命』（*The Fate of Place*）で展開した次の議論である。本稿で議論してきたポリシアやレプブリカという理念に基づく、アメリカ植民地における画一的かつ均質的な構造を有する都市の建設は、言ってみればヨーロッパ人が試みてきた時空間を超越する「普遍主義」の一方的かつ強権的な導入に等しく、本来であれば歴史的に生成してきた固有の性質や特徴を有するはずの場所（place）を無味乾燥な等質的な空間へと転換させ、搾取や収奪を目的とした「用地化」することに他ならない。ゆえに訳者の一人である江川隆男も、ケーシーの重要な指摘として「場所の復興」を挙げており、これは言うなればヨーロッパ人が「自己の場所を普遍的だと思い込み、それゆえその拡大を他者の場所の排除として推進できるという観念」を長期にわたって抱き続けてきたことに対する糾弾の意味合いがあると指摘している<sup>(134)</sup>。

しかし本稿のこれまでの議論を踏まえれば次の指摘もできるだろう。先住民の中にもインカやアステカのような巨大な帝国を築いた人々がおり、彼らもヨーロッパ人と同じくグリッドラインに基づく都市計画を実践する文化を有していた。つまり「普遍主義」を掲げて場所を「用地化」してきたのはヨーロッパ人に限ったことではなく、スペイン人到来以前のアメ리카大陸においても先住民帝国の拡大と並行して人工的な空間が生み出される一方で、在来の文化や慣習の一部は抑圧され廃れていったのである。そしてこうした過程においても、新たな文化や価値観が創造されていった事実は忘れてはならない。

ここまでの議論を振り返れば、俗人や聖職者を問わず、近世に生きたスペイン人たちの考えの中に、征服した先住民たちの文化や慣習に有用な価値を見いだしてその一部を植民地行政や改宗事業に応用できないかと試行錯誤が絶えず試みられていたことがわかるが、こうした考え方がスペインで誕生したきっかけとして、サラマンカ学派、特にその先駆者のフランシスコ・デ・ビトリア (Francisco de Vitoria 1483 もしくは 1486-1546) の功績が大きい。松森奈津子によれば、ビトリアは、たとえ未熟だとしてもいかなる人間にも固有の政治権力があると考え、すべての人間は神の像であるかぎり生来的に理性と所有権を有すると主張して多くの人に衝撃を与えた。そして先住民は固有の社会と権利、秩序形成能力を有するというビトリアの主張はサラマンカ学派の基礎的な理論となった<sup>(135)</sup>。さらに松森の分類に従えば、本稿で頻繁に取り上げたアコスタは後期サラマンカ学派の第三世代 (1576-1615) に属するため<sup>(136)</sup>、彼の『新大陸自然文化史』にはビトリアの思想とも重なる部分が多い。

アコスタの『新大陸自然文化史』は、ビトリアの言葉を借りれば、先住民に固有の秩序形成能力、すなわち本稿の議論の中核であるポリシアの存在をインカやアステカに見いだしていた点で画期的と言えるが、これに匹敵する著作として、ラス・カサスの『インディオを弁ず』 (*Apologética historia sumaria*) を挙げておきたい。『新大陸自然文化史』は本稿で論じてきたとおり幾度もの再版やヨーロッパ諸言語への翻訳が進み相当の人気を博したが、ラス・カサスのこの論考はおそらく 1551 年以降に書かれたものの、その出版は 20 世紀初頭まで待たねばならなかった<sup>(137)</sup>。ジョン・エリオット (John Elliott) はこの知られざる重要な論考について次のように述べている。

ラス・カサスの大著『インディオを弁ず』は、おそらく 1550 年代に書かれたものと思われるが、読まれざる名作とはこのような書物を指すことばであろう (中略)。それ (『インディオを弁ず』) が陽の目をみるには、やはり 20 世紀を待たねばならなかった (中略)。ラス・カサスは彼のテーゼ、すなわちインディオは完全に理性的存在であり、完全に自治の能力を有し、また、福音を受容することも可能だということ

を立証するために、自然的環境と道徳的な面双方から彼らを分析する。そのとき、ラス・カサスが依拠したのもアリストテレスの規範だった。しかも、インディオ社会の分析の結果は旧世界のいろいろな社会の同様な分析結果と比較されたが、ことにギリシア人やローマ人の社会 (むろんそればかりではなかった) の分析と対比された。それゆえに、ラス・カサスの研究は、比較文化人類学の秀れた試論ともなっている。そこではギリシア人、ローマ人、エジプト人、古代ガリア人、古代ブリトン人などの社会的習俗や宗教的慣行が、アステカ人やインカ人のそれらとともに吟味され、だいたい後者に軍配があげられている (中略)。もっとも野蛮な連中でも、注意を怠らず、ねばり強くやれば、いずれは秩序ある国家生活を営むようにしむけることができる、と彼 (ラス・カサス) はいうのである<sup>(138)</sup>。

そもそもこの『インディオを弁ず』の正式タイトルはさらに長く、「先住民が有するポリシアやレプブリカについて」という一言からも明らかなように<sup>(139)</sup>、先住民がこうした要素を元来内包するか否かという問題は、ラス・カサスにとってはもはや自明であった。つまりラス・カサスは、膨大な経験的かつ歴史的なデータをもとにして征服前の先住民たちが「真の市民社会」 (true civil society) を有していたのだと主張したかったのである<sup>(140)</sup>。

最後に本稿の締めくくりとして、先住民の過去の偉大さを再認識して多様な目的のために活用しようとする試みは植民地時代に限ったものではなく、19 世紀初頭のスペイン領アメリカ諸地域の独立運動にも見られたことを指摘したい。特筆に値するのは、アルゼンチン独立運動の指導者の一人マヌエル・ベルグラノー (Manuel Belgrano 1770-1820) が 1816 年のトゥクマン会議 (Congreso de Tucumán) で提唱したいわゆる「インカ計画」 (Plan del Inca) である。これは、立憲君主制を成立させるためにインカの血筋を引く人物を国王に据えて国政を担わせるという政策提言であった。この時ベルグラノーは、インカの血を引く混血のフアン・バウティスタ・トゥパック・アマル (Juan Bautista Túpac Amaru 1747-1827) が現在のアルゼンチン共和国の原型となるリオデラプラタ諸州連合 (Provin-

cias Unidas del Río de la Plata) の国王として適任と  
考えていた<sup>(141)</sup>。かの有名なホセ・デ・サン・マルティ  
ン (José de San Martín 1778-1850) も、独立後のペ  
ルーに君主制の導入を考えていたことで、共和制を  
構想していたシモン・ボリーバル (Simón Bolívar  
1783-1830) と意見が対立し、1822 年のグアヤキル  
会議 (Entrevista de Guayaquil) で両者は決裂した  
ことは周知のとおりである<sup>(142)</sup>。なおサン・マルティ  
ンは、独立戦争を進めるうえでチリの先住民マプー  
チュ (本論で言及したアラウカーノと同様) の協力を  
仰ぐ際、「私もまた先住民だ」(Yo también soy  
indio) と発言し、彼らとの親和性を強調したと言  
われている<sup>(143)</sup>。実際サン・マルティンは長い間アメ  
リカ大陸生まれの白人 (criollo) とされてきたが、  
実は前述のラプラタ地域のイエズス会布教区の一つ  
ジャペジュ (Yapeyú) に 18 世紀後半に役人として  
赴任したスペイン人男性と先住民女性との間に生ま  
れた混血という事実が 21 世紀に入りようやく公に  
指摘されるようになった<sup>(144)</sup>。いずれにしろこのよう  
な、先住民の過去の記憶や歴史を再活用しようとい  
う試みは、その時々時代の要請に応じて繰り返さ  
れてきたことであり、こうした試みは時代を超えて  
今日に至るまで継続されていると言ってよいだろ  
う。近現代のラテンアメリカにおけるこうした過去  
の歴史や記憶が再活用される具体的なプロセスや帰  
結は国際共同研究「古代アメリカの比較文明論」に  
従事する関係諸氏に委ね<sup>(145)</sup>、本稿の議論はここで閉  
じることにしたい。

## 注

- (1) 本稿は 2015-2016 年度科学研究費補助金 (新学術領域  
研究、課題番号 15H00715) による研究成果の一部である。
- (2) ホセ・デ・アカスタ『新大陸自然文化史』下巻、増田  
義郎訳、岩波書店、1966 年、257 頁 (第 6 巻、第 1 章) ;  
José de Acosta, *Hitoria natural y moral de Las Indias*, 2 ed.,  
México: FCE, 1962, p. 281. 本稿でしばしば引用するアコ  
スタ『新大陸自然文化史』のスペイン語版については、  
エドムンド・オゴルマン (Edmundo O'Gorman 1906-  
1995) 編の 1962 年出版、第二版に依拠した。以下、史料  
の引用に際して、既刊の日本語訳が存在する場合は基本  
的にそれを取り上げ、スペイン語原語の刊行史料が存在  
する場合はその書誌情報も明記する。日本語訳に関して  
は、「インディオ」を「先住民」、「ビルー」を「ペルー」、  
「インガ」を「インカ」など、若干の修正を経て引用した  
ケースがある。また読者の理解を助けるために語句を補っ  
て引用したケースもある。その場合は ( ) で示した。  
なお [ ] で挿入された語句は、史料訳者による挿入句  
である。また脚注に表れるスペイン語引用文中の [ ] は

本稿の筆者による挿入である。

- (3) エドゥアルド・ガレアノ『収奪された大地—ラテン  
アメリカ五百年—』大久保光夫訳、新評論、1986 年。
- (4) David Block, *Mission Culture on the upper Amazon:  
Native Tradition, Jesuit Enterprise & Secular Policy in  
Moxos, 1660-1880*, Lincoln: University of Nebraska Press,  
1994.
- (5) Gauvin Alexander Bailey, *Art on the Jesuit Missions in  
Asia and Latin America, 1542-1773*, Toronto: University of  
Tronto Press, 1999; Gauvin Alexander Bailey, *The Andean  
Hybrid Baroque: Convergent Cultures in the Churches of  
Colonial Peru*, Notre Dame: University of Notre Dame Press,  
2010; 岡田裕成・齋藤晃『南米キリスト教美術とコロニ  
アリズム』名古屋大学出版会、2007 年; 岡田裕成『ラテ  
ンアメリカ—越境する美術—』筑摩書房、2014 年。
- (6) Mónica Díaz, *Indigenous Writings from the Convent:  
Negotiating Ethnic Autonomy in Colonial Mexico*, Tucson:  
University of Arizona Press, 2010; Gabriela Ramos and  
Yanna Yannakakis (eds.), *Indigenous Intellectuals:  
Knowledge, Power, and Colonial Culture in Mexico and the  
Andes*, Durham: Duke University Press, 2014. 植民地空間に  
おける先住民たちの主体的な生の営みと言う観点から次  
の研究も示唆に富む。網野徹哉『インディオ社会史—ア  
ンデス植民地時代を生きた人々』みすず書房、2017 年。
- (7) その代表格が『新しい記録と良き統治』(*Primer nueva  
corónica y buen gobierno*) の筆者として有名な先住民フェ  
リペ・ワマン・ポマ・デ・アヤラ (Felipe Guaman Poma  
de Ayala 1550?-1616) である。染田秀藤・友枝啓泰『ア  
ンデスの記録者ワマン・ポマー—インディオが描いた《真  
実》—』平凡社、1992 年。またメキシコの先住民の血を  
引くフェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルショチ  
トル (Fernando de Alva Ixtlilxóchitl 1568?-1648) の事例も  
興味深く、近年、彼の蔵書に関する秀逸な研究が公にさ  
れた。Amber Brian, *Alva Ixtlilxochitl's Native Archive and  
the Circulation of Knowledge in Colonial Mexico*, Nashville:  
Vanderbilt University Press, 2016.
- (8) Jeremy Mumford, *Vertical Empire: The General Resettle-  
ment of Indians in the Colonial Andes*, Durham: Duke  
University Press, 2012. 本書の概要を知るうえで次は参考  
になる。Akira Saito, et. al., “Nuevos avances en el estudio  
de las reducciones toledanas,” *Bulletin of the National  
Museum of Ethnology*, Vol. 39, No. 1, 2014, pp. 123-167. 支  
配者であるスペイン人たちが円滑な植民地統治のために  
征服したインカの諸制度を活用していたというマン  
フォードの研究の先駆けとして次が挙げられる。Charles  
Gibson, *The Inca Concept of Sovereignty and the Spanish  
Administration in Peru*, New York: Greenwood Press, 1969.  
社会工学の基本的な考え方には「環境や社会経済のシス  
テムのデザイン」という壮大なコンセプトが内包される。  
人間を取り囲んでいる環境、社会、経済に関して何らか  
の問題が認められるならば、これを技術によって解決し  
ようという、人間の技を用いての社会改良の発想、これ  
が社会工学の基本姿勢である。肥田野登『入門社会工学  
—社会経済システムの予測・評価・デザイン—』日本評  
論社、2000 年、3, 7 頁。
- (9) 副王トレドの総巡察の前段階として、グレゴリオ・ゴ  
ンサレス・デ・クエンカ (Gregorio González de Cuenca



- 1524?-1581) がペルー北部で実施した巡察が挙げられる。この巡察の成果は1564年にトルヒーヨ (Trujillo) 市に対して出された法令にまとめられた。詳細は次を参照。María Rostworowski de Diez Canseco, “Algunos comentarios hechos a las ordenanzas del doctor Cuenca,” *Historia y Cultura*, No. 9, 1975, pp. 119-154; Miguel Ángel González de San Segundo, “El doctor Gregorio González de Cuenca, oidor de la Audiencia de Lima, y sus ordenanzas sobre caciques e indios principales (1566),” *Revista de Indias*, Vol. 42, No. 169-170, 1982, pp. 643-667.
- (10) Louis Baudin, *L’empire socialiste des Inka*, Paris: Institut d’Ethnologie, 1928。スペイン語ならびに英語訳のタイトルと出版年は次のとおり。スペイン語訳: *El imperio socialista de los incas* (1943, 1970, 1993)。英語訳: *A Socialist Empire: The Incas of Peru* (1961)。
- (11) 現在のパラグアイ南東部、アルゼンチン北東部、ブラジル南部、ウルグアイにまたがる領域。
- (12) 前述のペルー副王トレドが実践した先住民集住政策と同様に、その政策実践のために建設された先住民収容施設もスペイン語で *reducción* と呼ばれる。本稿では政策を「レドゥクション」、そしてこの政策に基づいて建設された施設については「布教区」と表記する。施設を「布教区」と表記する理由は、この建物内では住民に対してキリスト教への改宗事業が継続的かつ組織的に実践されていたからである。
- (13) Louis Baudin, *L’État jésuite du Paraguay: une théocratie socialistes*, Paris: Éditions Génin, 1962。
- (14) Eberhard Gothein, *Der christlich-soziale Staat der Jesuiten in Paraguay*, Leipzig: Duncker & Humblot, 1883。イタリア語訳が1928年と1987年に出版された。Clovis Lugon, *La République communiste chrétienne des Guaranis (1610-1768)*, Paris: Éditions ouvrières, 1949。フランス語では数版を重ね、ポルトガル語訳やポーランド語訳も存在する。
- (15) 科学研究費補助金・特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」(2002-2006年度、課題番号14083101)。
- (16) 内堀基光「資源をめぐる問題群の構成」内堀基光編『資源と人間』(『資源人類学』第1巻)、弘文堂、2007年、15-43、特に24-28頁。
- (17) 鈴木紀「資源化される古代文明—遺跡の調査と活用に関わるアクター分析—(序論)」『古代アメリカ』第18号、2015年、95-102頁。
- (18) James Lockhart, *The Nahuas after the Conquest: A Social and Cultural History of the Indians of Central Mexico, Sixteenth through Eighteenth Centuries*, Stanford: Stanford University Press, 1992。
- (19) フランス語の原題は *La vision des vaincus*。日本語訳は次のとおり。N. ワシュテル『敗者の想像力—インディオのみた新世界征服—』小池佑二訳、岩波書店、1984年。
- (20) Serge Gruzinski, *The Conquest of Mexico: The Incorporation of Indian Societies into the Western World, 16th-18th Centuries*, Oxford: Polity Press, 1993, pp. 260-281 (フランス語の原題は *La colonisation de l’imaginaire*) ; Thomas A. Abercrombie, *Pathways of Memory and Power: Ethnography and History among an Andean People*, Madison: University of Wisconsin Press, 1998, pp. 213-214。
- (21) John Leddy Phelan, *The Millennial Kingdom of the Franciscans in the New World*, 2 ed., Berkeley: University of California Press, 1970; José María Kobayashi, *La educación como conquista: empresa franciscana en México*, México: Colegio de México, 1974。
- (22) “Y porque tengo dicho a S. M. para aprender a ser cristianos, tienen [los indios] primero necesidad de saber ser hombres, y que se les introduzca el gobierno y modo de vivir político y razonable, [...]” Luis Hanke (ed.), *Los virreyes españoles en América durante el gobierno de la Casa de Austria, Perú*, Vol. 1, (Biblioteca de Autores Españoles, Vol. 280), Madrid: Atlas, 1978, pp. 128-149, esp. p. 140。次にも同じ史料が出ている。Marcos Jiménez de la Espada y José Urbano Martínez Carreras (eds.), *Relaciones geográficas de Indias: Perú*, Vol. 1, (Biblioteca de Autores Españoles, Vol. 183), Madrid: Atlas, 1965, p. 262。
- (23) アコスタ『世界布教をめざして』青木康征訳、岩波書店、1992年、267頁、第3部・第19章 (José de Acosta, “De procuranda indorum salute o predicación del evangelio de las Indias,” Francisco Mateos (ed.), *Obras del P. José de Acosta de la Compañía de Jesús (Biblioteca de Autores Españoles, Vol. 73)*, Madrid: Atlas, 1954, pp. 387-608, esp. p. 492.)。スペイン人官吏サラサル・デ・ビジャサンテ (Salazar de Villasante) がエクアドルのキト近郊の先住民について1570-1571年に書いた記録には「散り散りになった先住民たちが、アラブ人のように歩き回っていた」(*indios derramados, que andaban como alárabes*) とある。こうした記述は、アメリカ先住民をイスラーム教徒と等しい蔑視の対象としていたことを示している (Pilar Ponce Leiva (ed.), *Relaciones histórico-geográficas de la Audiencia de Quito: S. XVI-XIX*, Vol. 1, Madrid: CSIC, 1991, p. 87.)。
- (24) Antonius de Egaña (ed.), *Monumenta Peruana*, Vol. 1, Romae: Monumenta Historica Soc. Iesu, 1954, pp. 461-475, esp. p. 467。
- (25) 染田秀藤、篠原愛人監修『ラテンアメリカの歴史—史料から読み解く植民地時代—』大阪外国語大学ラテンアメリカ史研究会訳、世界思想社、2005年、147-148頁。この史料のスペイン語原文は次に掲載されている。Paulino Castañeda Delgado (ed.), *Don Vasco de Quiroga y su “Información en derecho,”* Madrid: Ediciones J. Porrúa Turanzas, 1974, pp. 151-152。キログアに関する研究は数多いが、とりわけ碩学シルビオ・サバラ (Silvio Zavala 1909-2014) のそれは一読に値する。Silvio Zavala, *Recuerdo de Vasco de Quiroga*, México: Editorial Porrúa, 1965。
- (26) “Cartas de Tomás López, licenciado y oidor de la Audiencia de los Confines, 9 de junio de 1550 y 29 de marzo de 1551 en Archivo General de Indias, Sevilla, España, Audiencia de Guatemala, l. 9.” 次からの引用。Magnus Mörner, “La difusión del castellano y el aislamiento de los indios: dos aspiraciones contradictorias de la Corona Española”, Juan Maluquer de Motes y Nicolau (ed.), *Homenaje a Jaime Vicens Vives*, Tomo II, Barcelona: Universidad de Barcelona, Facultad de filosofía y letras, 1967, pp. 435-446, esp. p. 437。
- (27) この問題については2で詳細に論じる。
- (28) Jeremy Ravi Mumford, “The “General Resettlement of the Indians” in Colonial Peru”, *MINPAKU Anthropology Newsletter*, No. 40. 2015, pp. 5-7, esp. p. 6; Mumford, *Vertical Empire*, p. 4。ポリシアをあえて英語で表すならば「civility」

- となる。これについては、フランスの作家であり、15-17世紀の同国における文芸復興運動 (French Renaissance) との関連で知られるギヨーム・ド・ラ・ペリエール (Guillaume de La Perrière) の *Le Miroir politique* (1555) の英語訳 (1598) が参考になる。John Howland Rowe, "Ethnography and Ethnology in the Sixteenth Century", *Kroeber Anthropological Society Papers*, Vol. 30, 1964, pp. 1-19, esp. pp. 6-7. 換言すれば、英語圏ではポリシアが commonwealth や civil society という考え方として発展し、18世紀に入ると civilization という概念にとってかわられたとも言える。なおフランス語には politesse という言葉があり、その意味は politeness である (Fermín del Pino, "Culturas clásicas y americanas en la obra del Padre Acosta," *América y la España del siglo XVI*, Tomo I, Madrid, 1982, pp. 327-362, esp. p. 351, nota 23.)。
- (29) Sabine MacCormack, *On the Wings of Time: Rome, the Incas, Spain, and Peru*, Princeton: Princeton University Press, 2009, pp. 183-184.
- (30) ペドロ・シエサ・デ・レオン『激動期アンデスを旅して』染田秀藤訳、岩波書店、1993年、95-96頁 (Pedro Cieza de León, *La crónica del Perú con tres mapas*, 2 ed., Madrid: Espasa-Calpe, 1932, p. 96, capítulo XXXII)。
- (31) シエサ・デ・レオン『激動期アンデスを旅して』217頁 (Cieza de León, *La crónica del Perú con tres mapas*, p. 273, capítulo XCII)。
- (32) ケチュア語のミトマクナ (mitmakuna) がスペイン語化した言葉。単数はミティマ (mitima) もしくはミトマ (mitma)。John Howland Rowe, "Inca Culture at the Time of the Spanish Conquest," Julian H. Steward (ed.), *Handbook of South American Indians*, Vol. 2 (The Andean Civilizations), Washington: Cooper Square, 1946, pp. 183-330, esp. pp. 269-270.
- (33) ペドロ・シエサ・デ・レオン『インカ帝国史』増田義郎訳、岩波書店、1979年、110-112頁 (Pedro Cieza de León, *El señorío de los incas: 2ª parte de la Crónica del Perú*, Lima: IEP, 1967, pp. 73-75, capítulo XXII)。
- (34) シエサ・デ・レオン『インカ帝国史』115頁 (Cieza de León, *El señorío de los incas*, p. 77, capítulo XXII)。
- (35) David. A. Brading, "The Incas and the Renaissance: The Royal Commentaries of Inca Garcilaso de la Vega," *Journal of Latin American Studies*, Vol. 18, No. 1, 1986, pp. 1-23.
- (36) Rodolfo Cerrón-Palomino (ed.), *Grammatica, o, arte de la lengua general de los indios de los reynos del Perú*, Madrid: ARCI, 1994, pp. 13-14.
- (37) Pedro Pizarro, "Relación del descubrimiento y conquista de los reinos del Perú, y del gobierno y orden que los naturales tenían, y tesoros que en ella se hallaron: y de las demás cosas que en él han sucedido hasta el día de la fecha. Hecha por Pedro Pizarro conquistador y poblador de estos dichos reinos y vecino de la ciudad de Arequipa," Martín Fernández de Navarrete (ed.), *Colección de documentos inéditos para la historia de España*, Vol. 5, Vaduz: Kraus Reprint, 1964-1967, pp. 201-388.
- (38) アメリゴ・ヴェスプッチ「新世界 (1503年?)」コロンプス、アメリゴ、ガマ、バルボア、マゼラン『航海の記録』(大航海時代叢書、第1期、1)、長南実訳、岩波書店、1965年、329頁。増田は加えて、「解説」において、ヴェスプッチの記録が「いろいろな疑いを人に抱かせるような、あいまいさと矛盾を持っていた」ことから、その記録の「真実性に疑い」が抱かれたり、ひどい時にはヴェスプッチに「ベテン師」というレッテルすらつけられたりした事実を紹介している (『航海の記録』253-254頁)。
- (39) Charles E. O'Neill y Joaquín M<sup>a</sup>. Domínguez, (eds.), *Diccionario histórico de la Compañía de Jesús: biográfico-temático*, Vol. 1, Madrid y Roma: Institutum Historicum y Universidad Pontificia Comillas, 2001, pp. 11-12. 原題 *De Procuranda Indorum Salute* の意味は『先住民救済論』だが、日本語抄訳としては次のタイトルで出版されている。アコスタ『世界布教をめざして』青木康征訳、岩波書店、1992年。
- (40) 『新大陸自然文化史』が初めて公にされたのは1590年(セビリア)で、スペイン語で執筆された。その後、ヨーロッパ諸言語に訳され(イタリア語が1597年、フランス語、オランダ語、ドイツ語がそれぞれ1598年、ラテン語が1602年、英語が1604年に出版)、多くの読者を獲得した(増田義郎「解説」アコスタ『新大陸自然文化史』上巻、49-50頁)。
- (41) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、286頁(第6巻、第11章); Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 293-294.
- (42) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、255-257頁(第6巻、第1章); Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 280-281.
- (43) アコスタ『世界布教をめざして』3頁(序文); Acosta, "De procuranda indorum salute," pp. 387-608, esp. 390.
- (44) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、257頁(第6巻、第1章); Acosta, *Historia natural y moral*, p. 281.
- (45) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、269頁(第6巻、第5章); Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 285-287.
- (46) "... me hizo consultar en varios lugares a varones muy doctos y experimentados en cosas de Indias, y leer ávidamente algunos escritos compuestos por ellos sobre esta materia con toda diligencia." Acosta, "De procuranda indorum salute," pp. 387-608, esp. 390. アコスタの日本語訳『世界布教をめざして』ではこの献辞は割愛されている。
- (47) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、257頁(第6巻、第1章); Acosta, *Historia natural y moral*, p. 281.
- (48) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、225-226頁(第5巻、第27章); Acosta, *Historia natural y moral*, p. 266. 訳者の増田は注釈にて、引用中の「一篇の論文」とは、リマの大司教ヘロニモ・デ・ロアイサの依頼によりポロが書いた『インディオの結婚についての論稿』(*Tratado del matorimonio de los indios*) としている。これはポロが1565-1570年に書いたものだが現存していない。
- (49) 彼の代表的な著作は刊行物として次のとおり出版されている。Polo de Ondegardo, *Informaciones acerca de la religión y gobierno de los Incas*, 2 Vols. (Colección de libros y documentos referentes a la historia del Perú, Vols. 3-4), Lima: Sanmartí, 1916-1917; C. A. R. (ed.), "Informe del Licenciado Juan Polo de Ondegardo al Licenciado Briviesca de Muñatones sobre la perpetuidad de las encomiendas en el Perú, 1561," *Revista Histórica: órgano del Instituto Histórico del Perú*, No. 13, 1940, pp. 125-196.
- (50) Anónima, "Relación de las costumbres antiguas de los naturales del Pirú," Francisco Esteve Barba, (ed.), *Crónicas*

- peruanas de interés indígena (*Biblioteca de Autores Españoles*, Vol. 209), Madrid: Atlas, 1968, pp. 155-156.
- (51) Fermín del Pino, “Los reinos de Méjico y Cuzco en la obra del P. Acosta,” *Revista de la Universidad Complutense*, Vol. 28, No. 117, 1979, pp. 13-43, esp. p. 19.
- (52) Francisco Mateos (ed.), *Obras del P. Bernabé Cobo de la Compañía de Jesús*, Vol. 2 (*Biblioteca de Autores Españoles*, Vol. 92) Madrid: Atlas, 1964, pp. 59-60.
- (53) *Diccionario Porrúa de historia, biografía y geografía de México*, 5 ed., Vol. 3, México: Editorial Porrúa, 1986, p. 2984; O’Neill y Domínguez, (eds.), *Diccionario histórico de la Compañía de Jesús*, Vol. 4, p. 3830.
- (54) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、457頁（第7巻、第28章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 373-377.
- (55) Ramsay MacMullen, *Christianizing the Roman Empire (A.D. 100-400)*, New Haven: Yale University Press, 1984; Peter Brown, *The World of Late Antiquity: AD 150-750*, London: Thames and Hudson, 1989.
- (56) 「炉と炉の火の神ヴェスタの神殿に燃える聖火を絶やさぬように守り、一生貞潔を誓った4人（または6人）の処女のこと」（アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、増田義郎訳、176頁、注96）。
- (57) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、175頁（第5巻、第15章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 240-242.
- (58) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、207頁（第5巻、第23章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 255-256.
- (59) 征服以前よりインカの間に崇められていた創造神。欧文では Pachacámac もしくは Pacha Kamaq と綴り、その意味は「大地を創造する神」。
- (60) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、163頁（第5巻、第12章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 235-237.
- (61) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、314-315頁（第6巻、第19章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 304-306.
- (62) 史料原文では Chiriguanás とある。
- (63) 史料原文では Chichimecos とある。
- (64) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、460頁（第7巻、第28章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 373-377.
- (65) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、284-285頁（第6巻、第11章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 293-294.
- (66) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、387-388頁（第7巻、第11章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 336-339.
- (67) アコスタ『世界布教をめざして』岩波書店、1992年、180-181頁（第3部・第3章）；Acosta, “De procuranda indorum salute,” pp. 387-608, esp. 462-463.
- (68) Mumford, *Vertical Empire*, pp. 99-117 (Chapter 7: Tyrants).
- (69) “Presentación de *Vertical Empire: The General Resettlement of Indians in the Colonial Andes* por Jeremy Ravi Mumford”, Saito, et. al., “Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas,” pp. 123-167, esp. pp. 128-129.
- (70) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、256-257頁（第6巻、第1章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 280-281.
- (71) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、360頁（第7巻、第3章）；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 322-324.
- (72) 網野徹哉『インカとスペイン帝国の交錯』講談社、2008年、177頁。
- (73) Mumford, “The “General Resettlement of the Indians” in Colonial Peru,” pp. 5-7, esp. p. 6.
- (74) Anthony Pagden, *The Fall of Natural Man: The American Indian and the Origins of Comparative Ethnology*, Cambridge: Cambridge University Press, 1986, p. 68.
- (75) “[...] en esta ciudad han andado de algunos años acá e andan más de presente muchos niños e muchachos menores de edad muy perdidos e vagabundos sin servir a nadie, ni querer aprender oficios, e sin corrección ni castigo alguno, ni querer seguir doctrina ni virtud, alguna, lo cual es en muchos daño e perjuicio de esta ciudad e república de ella, así por el grande cargo de conciencia, como por otros muchos inconvenientes que de ello se siguen, e por querer proveer e remediar en lo que dicho es, en cuanto en nosotros es, por el bien público de la dicha ciudad habemos platicado en el remedio de ello, como mejor convenga al servicio de Dios e bien e provecho de los dichos niños e muchachos, e habemos acordado de los recoger en una parte donde se les muestre por alguna buena persona o perronas la doctrina cristiana e otros actos de virtud e obras de cristianos, e corregirlos e castigarlos de lo contrario,” “Escritura por la que el cabildo de la Catedral cede al regimiento por un año un aposento del hospital de San Lucas para los niños de la doctrina, Burgos, 23 de octubre de 1543”, José Pérez Carmona, *La caridad cristiana en la protección al menor: datos para su historia en la provincia de Burgos*, Burgos: s.n., 1957, pp. 112-113.
- (76) Jorge E. Hardoy, “El modelo clásico de ciudad colonial hispanoamericana: un ensayo sobre la legislación urbana y la política urbana de España en América durante las primeras décadas del período colonial,” *Verhandlungen des XXXVIII: Internationalen Amerikanistenkongresses, Stuttgart-München, 12. Bis 18. August 1968*, Vol. 4, München: Klaus Renner, 1972, pp. 143-181.
- (77) Ramón Gutiérrez, *Arquitectura y urbanismo en Iberoamérica*, Madrid: Ediciones Cátedra, 1983, p. 93.
- (78) George M. Foster, *Culture and Conquest: America’s Spanish Heritage*, Chicago: Quadrangle Books, 1960, pp. 34-49 (Chapter 4: Cities, Towns and Villages: The Grid Plan Puzzle).
- (79) Foster, *Culture and Conquest*, pp. 40-43; Leopoldo Torres Balbas, “La edad media,” A. García y Bellido, et al., *Resumen histórico del urbanismo en España*, 2 ed., Madrid: Instituto de Estudios de Administración Local, 1968, pp. 67-170, esp. p. 127.
- (80) Soledad Vila, *La ciudad de Eiximenis: un proyecto teórico de urbanismo en el siglo XIV*, Valencia: Diputación Provincial de Valencia, 1984. 『ロ・クレスティア』の刊行版については次を参照。Francesc Eiximenis, *Lo Crestià: selecció*, Barcelona: Edicions 62, 1983.
- (81) 岡田『ラテンアメリカ越境する美術』27頁；河原温『都市の創造力』岩波書店、2009年、236-237頁；Philip Jacks, *The Antiquarian and the Myth of Antiquity: The Origins of Rome in Renaissance Thought*, Cambridge: Cambridge University Press, 1993, pp. 99-110 (The Urbis Picture of Alberti



- を参照)。ウィトルウィウスの著作は15世紀後半に初の印刷版が誕生し、ヨーロッパ各地で広く読まれた (Richard L. Kagan and Fernando Marias, *Urban Images of the Hispanic World, 1493-1793*, New Heaven: Yale University Press, 2000, p. 33)。アルベルティもこうした読者の一人であったことは想像に難くない。
- (82) 河原『都市の創造力』p. 238.
- (83) 河原『都市の創造力』p. 238.
- (84) 河原『都市の創造力』pp. 238-239.
- (85) 河原『都市の創造力』239頁。関連事項として次の文献も有益。ジェフリ・パーカー『長篠合戦の世界史—ヨーロッパ軍事革命の衝撃1500~1800年—』大久保桂子訳、同文館出版；1995年、バート・S・ホール『火器の誕生とヨーロッパの戦争』市場泰男訳、平凡社、1999年；白幡俊輔『軍事技術者のイタリア・ルネサンス—築城・大砲・理想都市—』思文閣出版、2012年。
- (86) Francisco de Solano (ed), *La ciudad Iberoamericana hasta 1573 (Historia urbana de Iberoamérica, Vol. 1)*, Madrid: Testimonio, 1987, p. 75; George Kubler, *Mexican Architecture of the Sixteenth Century*, Vol. 1, New Heaven: Yale University Press, 1948, p. 99.
- (87) Guillermo Tovar de Teresa, “La utopía del virrey de Mendoza,” Guillermo Tovar de Teresa, Miguel León-Portilla y Silvio Arturo Zavala (eds.), *La Utopía mexicana del siglo XVI: lo bello, lo verdadero y lo bueno*, México: Grupo Azabache, 1992, pp. 24-26. 次からの引用。岡田『ラテンアメリカ越境する美術』27-28頁。
- (88) Tovar de Teresa, “La utopía del virrey de Mendoza,” p. 29. 次からの引用。岡田『ラテンアメリカ越境する美術—』27-28頁。
- (89) 岡田『ラテンアメリカ越境する美術—』27-28頁。
- (90) “The columns are round and smooth, since Vitruvius did not recommend square columns and those that are grooved in the middle.” Francisco Cervantes de Salazar, *Life in the Imperial and Loyal City of Mexico in New Spain and the Royal and Pontifical University of Mexico as Described in the Dialogues for the Study of the Latin Language Prepared by Francisco Cervantes de Salazar for Use in His Classes and Printed in 1554 by Juan Pablos; Now Published in Facsimile with a Translation by Minnie Lee Barrett Shepard; and an Introduction and Notes by Carlos Eduardo Castañeda*, Austin: University of Texas Press, 1953, p. 42. セルバンテス・デ・サラサルに関しては次も有益。Diane M. Bono, *Cultural Diffusion of Spanish Humanism in New Spain: Francisco Cervantes de Salazar's Diálogo de la dignidad del hombre*, New York: P. Lang, 1991.
- (91) Dan Stanislawski, “Early Spanish Town Planning in the New World,” *Geographical Review*, Vol. 37, No. 1, 1947, pp. 94-105, esp. 102-104.
- (92) Foster, *Culture and Conquest*, p. 47. サント・ドミンゴの碁盤目状の地図が次にある。Jorge E. Hardoy, “Urbanismo colonial en América del Sur: siglo XVI,” Gabriel Alomar (ed.), *De Teotihuacán a Brasilia: estudios de historia urbana iberoamericana y filipina*, Madrid: Instituto de Estudios de Administración Local, 1987, pp. 213-255, esp. p. 248.
- (93) Esteban Mira Caballos, *Nicolás de Ovando y los orígenes del sistema colonial español, 1502-1509*, Santo Domingo, Patronato de la Ciudad Colonial de Santo Domingo, 2000, p. 26.
- (94) “[...] habéis de repartir los solares del lugar para hacer las casas y éstos han de ser repartidos según las calidades de las personas, e sean de comienzo dados por orden; por manera que hechos los solares, el pueblo parezca ordenado, así en el lugar que se dejare para plaza, como el lugar en que hubiere la iglesia, como en la orden que tuvieren las calles; [...],” “Instrucción dada por el Rey a Pedrarias Dávila, para su viaje a la Provincia de Castilla de Oro, que iba a poblar y pacificar con la gente que llevaba,” *Colección de documentos inéditos relativos al descubrimiento, conquista y organización de las antiguas posesiones españolas de América y Oceanía, sacados de los archivos del reino y muy especialmente del de Indias*, Vol. 39, Madrid: Manuel G. Hernández, 1883, pp. 280-298, esp. 285. こうした命令を受けたペドラリアスが1522年に建設した町が現在のパナマに残るナタ・デ・ロス・カバジェロス (Natá de los Caballeros) である。そしてこれをモデルとして、ヌエバ・エスパーニャ副王領内ではメキシコ市やオアハカが、ペルー副王領内ではトルヒーヨやリマが建設された (Eduardo Tejeira-Davis, “Pedrarias Davila and his Cities in Panama, 1513-1522: New Facts on Early Spanish Settlements in America,” *Jahrbuch für Geschichte Lateinamerikas*, Vol. 33, 1996, pp. 27-61)。
- (95) “[Lima] Tiene singular belleza en las plantas, y proporción de las plazas, y las calles, iguales todas, y parejas por nivel; la sumptuosidad, y magnificencia de sus Templos; y en la buena traza con que todas estas cosas están dispuestas, y labradas; [...] Todas [las calles de Lima] por su igualdad, y anchura, y rectitud son vistosisimas, [...],” Buenaventura de Salinas y Córdova, *Memorial de las historias del nuevo mundo Piru: con introducción de Luis E. Valcarcel y un estudio sobre el autor de Warren L. Cook*, Lima: Universidad Nacional Mayor de San Marcos, 1957, pp. 108-109 (Discurso II, Capítulo II).
- (96) 例えば古代ローマ人の建築技法の驚異的な技術はよく知られているが、偉大なる技法や文化を有していた人々は古代世界に他にも存在し、ローマ人のみを殊更に賞賛すべきでないという次の指摘は重要である。「ローマ人が古代の人びとのあいだでただひとり直線から成る計画と四方位定位との形式を実践したのではなかった。偉大な文明はいずれもそれを実践しており、すべてはその起源に関する、また計画家と建設者とを導く儀礼に関する神話の説明を有している」。ジョーゼフ・リクワート『「まち」のアイデア—ローマと古代世界の都市の形の人間学—』前川道郎・小野育雄 [訳] みすず書房、1991年、48頁。同ページの序を参照。
- (97) リクワート『「まち」のアイデア』299-300頁。絵文書の名称「メンドサ」の由来は、前述の初代ヌエバ・エスパーニャ副王アントニオ・デ・メンドサがこの絵文書を含む一連の報告書簡を国王カルロス1世に送付したことによる。
- (98) George Kubler, “The Colonial Plan of Cholula,” Jorge Enrique Hardoy y Richard S. Schaedel (eds.), *El proceso de urbanización en América desde sus orígenes hasta nuestros días*, Buenos Aires: Editorial del Instituto, 1969, pp. 209-223; Erwin Walter Palm, “Observaciones sobre el plano de

- Tenochtitlan,” Hardoy y Schaedel (eds.), *El proceso de urbanización en América*, pp. 127-131.
- (99) René Millon, “Urbanization at Teotihuacan: The Teotihuacan Mapping Project,” Hardoy y Schaedel (eds.), *El proceso de urbanización en América*, pp. 105-120.
- (100) 次の本に挿入されている。Giovanni Battista Ramusio, *Delle Navigationi Et Viaggi Volvme Terzo [...]*, Venetia: Giunti, 1606. また次のとおり校訂版が存在する。Marica Milanesi (ed.), *Navigazioni e viaggi*, Vols. 1-6, Trino: G. Einaudi, 1978-1988.
- (101) Jeremy Ravi Mumford, “The “General Resettlement of the Indians” in Colonial Peru,” pp. 5-7, esp. p. 6; Dante G. Salas Delgado, *Arqueoastronomía inka, Cusco: cosmovisión y arquitectura mágica*, Cusco: D.G. Salas Delgado, 2011, (Cusco ciudad puma を見よ); James Arévalo Merejildo-Chaski, *El despertar del puma: camino iniciático: evidencias astronómicas en los andes*, [s.n.], 1997.
- (102) リクワート『「まち」のアイデア』299-300頁。
- (103) James C. Scott, *Seeing Like a State: How Certain Schemes to Improve the Human Condition Have Failed*, New Heaven: Yale University Press, 1998, pp. 87-102 (Part 2, Chapter 3: Authoritarian High Modernism).
- (104) Alan Durston, “El proceso reduccional en el sur andino: confrontación y síntesis de sistemas espaciales,” *Revista de Historia Indígena*, No. 4, 1999, pp. 75-101, esp. p. 84.
- (105) “Presentación de Vertical Empire: The General Resettlement of Indians in the Colonial Andes por Jeremy Ravi Mumford”, Saito, et. al., “Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas,” pp. 123-167, esp. 129.
- (106) “Y porque no era posible doctrinar a estos indios ni hacerlos vivir en policía sin sacarlos de sus escondrijos, para que esto se facilitase, como se hizo, se pasaron y sacaron en las reducciones a poblaciones y lugares públicos y se les abrieron las calles por cuadra, conforme a la traza de los lugares españoles, sacando las puertas a las calles, para que pusiesen ser vistos y visitados de la justicia y sacerdotes, [...]” de la Espada y Martínez Carreras (eds.), *Relaciones geográficas de Indias: Perú*, Vol. 1, p. 261.
- (107) マティエンソに関する秀逸な研究は次。Guillermo Lohmann Villena, *Juan de Matienzo, autor del “Gobierno del Perú”: su personalidad y su obra*, Sevilla: EEHA, 1966.
- (108) Juan de Matienzo, *Gobierno del Perú* (1567), Paris y Lima: IFEA, 1967, pp. 48-56 (Parte I, Capítulo XIV). マティエンソのこの著作は1910年にブエノスアイレスでも出版されているが、このブエノスアイレス出版においては、理由はわからないが、本文の一部が断片的に割愛されている。
- (109) de la Espada y Martínez Carreras (eds.), *Relaciones geográficas de Indias: Perú*, Vol. 1, p. 261.
- (110) 岡田・齋藤『南米キリスト教美術とコロニアリズム』76-79頁。布野修司、ヒメネス・ベルデホ ホアン・ラモン『グリッド都市—スペイン植民都市の起源、形成、変容、転生—』京都大学学術出版会、2013年。
- (111) “Presentación de *Negotiated Settlements: Andean Communities and Landscapes under Inka and Spanish Colonialism* por Steven A. Wernke,” Saito, et. al., “Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas,” pp. 123-167, esp. p. 136.
- (112) “Comentario sobre los tres libros por Karen Spalding,” Saito, et. al., “Nuevos avances en el estudio de las reducciones toledanas,” pp. 123-167, esp. p. 159.
- (113) その代表がアレハンドロ・マラガ・メディーナ (Alejandro Málaga Medina) である。
- (114) Ann M. Wightman, *Indigenous Migration and Social Change: The Forasteros of Cuzco, 1570-1720*, Durham: Duke University Press, 1990.
- (115) 齋藤晃代表の科学研究費補助金基盤研究A「アンデスにおける植民地的近代—副王トレドの総集住化の総合的研究—」(2015-2019年度、課題番号15H01911)がこれにあたる。
- (116) Mario Cárdenas Ayaipoma, “El pueblo de Santiago: un ghetto en Lima virreynal,” *Boletín del Instituto Francés de Estudios Andinos*, Vol. 9, No. 8, 3-4, 1980, pp. 19-48; Alexandre Coello de la Rosa, *Espacios de exclusión, espacios de poder: el cercado de Lima colonial (1568-1606)*, Lima: Pontificia Univ. Católica del Perú, 2006; Amino Tetsuya, “Las lágrimas de Nuestra Señora de Copacabana: un milagro de la imagen de María y los indios en diáspora de Lima en 1591,” *The Journal of the Department of Liberal Arts (University of Tokyo)*, Vol. 22, 1990, pp. 35-65; Amino Tetsuya, “Un milagro de la Virgen y la libertad de los indios en Lima: aspectos históricos de la reducción urbana en el caso del Cercado y el barrio de San Lázaro,” Akira Saito y Claudia Rosas Lauro (eds.), *Reducciones: la concentración forzada de las poblaciones indígenas en el Virreinato del Perú*, Lima: PUCP, 2017, pp. 147-189.
- (117) Karen Spalding, *Huarochirí, an Andean Society under Inca and Spanish Rule*, Stanford: Stanford University Press, 1984.
- (118) Alfonso Echánove, “Origen y evolución de la idea jesuítica de reducciones en las misiones del virreinato del Perú (primera parte),” *Missionalia Hispanica*, Vol. 12, 1955, pp. 95-144; Alfonso Echánove, “Origen y evolución de la idea jesuítica de reducciones en las misiones del virreinato del Perú (segunda parte),” *Missionalia Hispanica*, Vol. 13, 1956, pp. 497-540; Ramón Gutiérrez, et. al., *Arquitectura del altiplano peruano*, 2 ed., Buenos Aires: Libros de Hispanoamérica, 1986, pp. 323-382; Norman Meiklejohn, *La iglesia y los Lupaqs de Chucuito durante la colonia*, Cusco: Centro de Estudios Rurales Andinos “Bartolomé de las Casas,” 1988, pp. 193-246; Ricardo González, “El Juli jesuítico: ¿modelo misional o proyección historiográfica?,” *Antiguos jesuitas en Iberoamérica*, Vol. 2, No. 1, 2014, pp. 85-100.
- (119) “Jacinto Barrasa, *Historia de la Compañía de Jesús en la Provincia del Perú, 1674*, manuscrito incompleto, según copia manuscrita de 1880, Archivo Histórico de la Provincia de Toledo, Alcalá de Henares, España, C-277. Leg. 68, p. 970.” 次からの引用。Alfonso Echánove, “Origen y evolución de la idea jesuítica de reducciones en las Misiones del Virreinato del Perú (primera parte),” *Missionalia Hispanica*, pp. 95-144, esp. 138-139.
- (120) これに関連して、アコスタの命を受けて宣教活動に従事したイエズス会士ブラス・バレラ (Blas Valera Pérez 1545-1597) を典型例として挙げられる。特に次の研究書

の第3章、ワロチリ、セルカド、フリにおけるバレラの活動を参照。Sabine Hyland, *The Jesuit and the Incas: The Extraordinary Life of Padre Blas Valera, S.J.*, Ann Arbor: University of Michigan Press, 2003, pp. 32-71.

- (121) Francisco Mateos, (ed.), *Historia general de la compañía de Jesús en la provincia del Perú: crónica anónima de 1600 que trata del establecimiento y misiones de la Compañía de Jesús en los países de habla española en la América meridional*, Vol. 2, Madrid: CSIC, 1944, p. 400; Michael Sievernich, “Conquistar todo el mundo: los fundamentos espirituales de las misiones jesuíticas,” Karl Kohut, María Cristina Torales Pachecho [i.e. Pacheco] (eds.), *Desde los confines de los imperios ibéricos: los jesuitas de habla alemana en las misiones americanas*, Frankfurt: Iberoamericana y Vervuert, 2007, pp. 3-23, esp. p. 11; Rodrigo Moreno Jeria, “El Padre Diego de Torres Bollo y la fundación de la Provincia Jesuítica del Paraguay, 1604-1608,” *Veritas*, No. 6, 1998, pp. 69-84, esp. p. 73; Rodrigo Moreno Jeria, “El Padre Diego de Torres Bollo, fundador de la Provincia Jesuítica del Paraguay,” *Notas históricas y geográficas*, No. 11, 2000, pp. 151-164.
- (122) “Primera instrucción del P. Torres. Para el Guayrá, 1609,” Pablo Hernández, *Organización social de las doctrinas guaraníes de la Compañía de Jesús*, Vol. 1, Barcelona: Gustavo Gili, 1913, pp. 580-584, esp. p. 582, No. 8 (apéndice documental, No. 40).
- (123) Mateos, (ed.), *Historia general de la compañía de Jesús en la provincia del Perú*, p. 410, nota 1.
- (124) del Pino, “Los reinos de Méjico y Cuzco en la obra del P. Acosta,” pp. 13-43, esp. p. 37. 各章のテーマは次のとおり (アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、287-313頁、第6巻)。第12章：ペルーのインカ王の政治について、第13章：インカの行った臣下の配置について、第14章：インカの建造物と建築法について、第15章：インカの歳入と、インディオに課した貢物納入の命について、第16章：インディオが学んだ仕事について、第17章：インカの用いていた郵便と飛脚について、第18章：インカの施工した法令、裁判、刑罰、および彼らの婚礼について；Acosta, *Historia natural y moral*, pp. 294-304.
- (125) Juan Carlos Garavaglia, *Mercado interno y economía colonial: tres siglos de historia de la yerba mate*, México: Grijalbo, 1983; Juan Carlos Garavaglia, “Los jesuitas en el Río de la Plata: el negocio de las reducciones,” *Historia 16*, julio de 1976, pp. 75-79.
- (126) Rafael Carbonell de Masy, *Estrategias de desarrollo rural en los pueblos guaraníes (1609-1767)*, Barcelona: Bosch, 1992.
- (127) フランクリン・ピース、増田義郎『図説インカ帝国』小学館、1988年、134-136頁；ワシュテル『敗者の想像力』101-105頁。
- (128) この問題も別稿で改めて論じるべき問題だが、ヨーロッパの知的伝統として、「国家や神」と形容された土地とは異なる個人の土地、言うなれば個人資産 (private property) を重視するという系譜がある。例えば本稿で取り上げたマティエンソは、インカに対する否定的な評価の一つとして、彼らが個人資産という概念を欠いていることを根拠として、次のように指摘している。“Así, estos pobres indios no es mucho que sean ociosos y no tengan cui-

dado de trabajar pues hasta aquí no han tenido cosa propia, sino todo en común. Mal se han podido aficionar al trabajo pues no era en su provecho, sino de sus caciques. Poniéndose ahora en orden, como luego diré, y dándoles a cada uno tierras propias y dinero para sí mismo en pago de su trabajo, para con él comprar carneros de la tierra y ganado de España y otras cosas para sí, aficionar sean a trabajar, y comenzará por aquí a entrar en ellos la policía, como aconsejó el filósofo reprobando la República de Sócrates.” Matienzo, *Gobierno del Perú* (1567), p. 20 (Parte I, Capítulo V). 個人資産の重視という考え方は私有財産制や資本主義の勃興とも関連しており、重要な研究テーマである。

- (129) Mateos (ed.), *Historia general de la Compañía de Jesús en la provincia del Perú*, pp. 406-407.
- (130) Mateos (ed.), *Historia general de la Compañía de Jesús en la provincia del Perú*, p. 409.
- (131) アコスタ『新大陸自然文化史』下巻、増田義郎訳、257頁 (第6巻、第1章)；Acosta, *Historia natural y moral*, p. 281.
- (132) ジョン・G. ナイハルト『ブラック・エルクは語る』宮下嶺夫訳、めくまーる、2001年。
- (133) リクワート『「まち」のアイデア』、10頁。
- (134) エドワード・ケーシー『場所の運命—哲学における隠された歴史—』江川隆男ほか訳、新曜社、2008年、12-13, 455頁。
- (135) 松森奈津子「サラマンカ学派—『野蛮人』と政治権力—」川出良枝編『主権と自由』（『岩波講座政治哲学』第1巻）岩波書店、2014年、51-71、特に57頁。
- (136) 松森「サラマンカ学派」57頁。
- (137) Pagden, *The Fall of Natural Man*, p. 120. この『インディオを弁ず』は20世紀以降に校訂版が数回にわたって出版された。本稿ではさしあたり次を挙げておく。Bartolomé de las Casas, *Apologética historia sumaria*, I-III, (*Obras completas*, Vols. 6-8), Madrid: Alianza, 1992.
- (138) ジョン・H・エリオット『旧世界と新世界—1492-1650—』越智武臣・川北稔訳、岩波書店、2005年、76-77頁。
- (139) 正式タイトルは次のとおり。*Apologética historia sumaria quanto a las cualidades, disposición, descripción, cielo y suelo destas tierras, y condiciones naturales, policías, repúblicas, manera de vivir e costumbres de las gentes destas Indias occidentales y meridionales, cuyo imperio soberano pertenece a los reyes de Castilla*.
- (140) Pagden, *The Fall of Natural Man*, p. 121.
- (141) Eduardo B. Astesano, *Juan Bautista de América: el rey Inca de Manuel Belgrano*, Buenos Aires: Castañeda, 1979, pp. 121-125, 173-175.
- (142) Gerhard Masur, “The Conference of Guayaquil,” *Hispanic American Historical Review*, Vol. 31, No. 2, 1951, pp. 189-229; Vicente Lecuna, “Bolívar and San Martín at Guayaquil,” *Hispanic American Historical Review*, Vol. 31, No. 3, 1951, pp. 369-393.
- (143) Roberto Mac-Lean y Estenós, *Presencia del indio en América*. México: Instituto de Investigaciones Sociales, Universidad Nacional, 1958, pp. 100-101.
- (144) Hugo Chumbita, *El Secreto de Yapeyú: el origen mestizo de San Martín*, Buenos Aires: Emecé, 2001. アルゼンチン大統領バルトロメ・ミトレ (Bartolomé Mitre 1821-1906 [任



期 1862-1868]) が 1887-1888 年に公にした大著『サン・マルティンの歴史とアメリカの解放』(*Historia de San Martín y de la emancipación americana*) がサン・マルティン白人説の構築と神話化に大きく寄与した事実を忘れてはならない。Bartolomé Mitre, *Historia de San Martín y de la emancipación sudamericana*, 2 ed., Vols. 1-3, Buenos Aires: Editorial Universitaria de Buenos Aires, 1977.

- (145) 日本学術振興会科学研究費補助金新学術領域研究「古代アメリカの比較文明論」の研究項目 A04「植民地時代から現代の中南米の先住民文化」(2014-2018 年度、課題番号 26101005) がこれにあたる (<http://dendro.naruto-u.ac.jp/csaac/>)。